

同仁会と『同仁』

大里 浩 秋

1. 同仁会について

同仁会は明治35（1902）年6月に結成され、昭和20（1945）年の敗戦まで続いた医学界における一団体である。この団体の歩みを簡単にまとめると、次のごとくである。

明治27、8年の日清戦争に勝利した後、日本は「英・米・仏・露の間に伍して一等国の地歩漸く固く、国民は東亜の先進国として爾他の諸国を誘掖啓発する義務を深く認識するに至り」（『同仁会四十年史』2頁。以下、『四十年史』と略称。文中の漢字の旧字体を新字体に改め、カタカナについてはひらがなに改めた。今後の引用も、ことわらない限りは『四十年史』からのものである）、医学界でもその認識を実践に移そうとする動きがあつて「公爵近衛篤磨氏等東亜同文公司（東亜同文会の前身）関係の人士を中心として」（6頁）医学界の一部の人々によって「同文医会」が組織された。その後、明治34年末頃から「清韓諸国を医学的に啓発せんと企てる一団があり」（6頁）、翌35年に「亜細亜医会」を作ることになったが、それが実行されないうちに、先の同文医会をも併合した組織を「同仁会」の名のもとに結成することになり、3月に近衛篤磨、長岡護美、北里柴三郎、岸田吟香、片山国嘉等30余名が創立協議会を開き、そこで選出した北里ら創立総会準備委員が準備をして、6月16日に創立総会を開いた。総会当日は外務大臣小村寿太郎、清国公使蔡鈞が出席、席上「長岡子爵は日清国交の上より我が医学を対岸に扶植するの必要を論じ、蔡公使も亦本会の趣旨に賛同の意を表明し」た（6頁）。この総会およびその後財団法人になることを申請し承認される過程で整備確定した同仁会規則（「同仁

会寄付行為」）の「目的及事業」の部分を抜き出すと、

第五条 本会の目的は清韓其他亜細亜諸国に医学及之に随伴する技術を普及せしめ且彼我人民の健康を保護し病苦を救済するにあり。

第六条 本会は前条の目的を達するため左の事項を漸次実施す。

- 一、清韓其他亜細亜諸国に対し医学校及医院設立を勧誘し又之を設立すること
- 二、前記諸国の政府及彼我人民の招聘に応じて医師及薬剤師其他之に随伴する技術を有する者を紹介すること
- 三、前記諸国の医事衛生及薬品に関する件を調査し時宜に依り其機関の設置を勧誘すること
- 四、前記の諸国へ本邦の医師及薬剤師の移住開業を扶助し又は之に便益を与ふること
- 五、前記諸国の医学生及薬学生の留学を勧誘し且其留学生を保護し修業の便益を与ふること
- 六、本会は前記諸国に適切なる医学薬学及之に随伴する技術に関する図書を刊行すること

となる。こうして、創立総会で発足した会長長岡護美以下のスタッフが会の趣旨内容を対外的に宣伝して会員を募ると共に、上述のごとき事業に着手するのである。

早い時期から取り組まれたのは医師の派遣で、中国では当地の医学校の教師になったり、在住日本人（以下、「居留民」と呼ぶ）の要請で赴任する者があり、朝鮮では、日本の京釜鉄道起工に伴

うその沿線地区への医師配置に応じて赴任したが、その数は徐々に増えて、南はバンコック、シンガポール等への派遣を含めて大正元年までに329名に達した。但し、地域的な広がりはこの時期までの医師派遣に限られているようであり、上記「同仁会規則」にある「清韓其他亜細亞諸国」にいろいろ働きかけるといえるのは、実際には「清韓」に限定されたものであり、さらには、中国に的を絞ったものであることは同仁会の各種言動から明らかである（2でも触れる）。

明治37年8月長岡会長が辞任し、その後任に大隈重信が就任した頃から、会の運営が活発となり、明治39年には朝鮮と中国東北（以下、「満州」と記述）にいくつか病院を開設した。朝鮮では、大邱、平壤、龍山に、満州においては、安東、營口に同仁医院を開設した。明治43年、日韓併合を機に朝鮮各地の同仁医院は朝鮮総督府に移譲され、安東と營口の場合は、南満州鉄道会社に満州各地に病院設立の計画があったことから、それに協力する形で譲渡した。

その後、大正3年1月北京に日華同仁医院（のち北京同仁医院と改称）を開設した後、満鉄が医院設立を計画する満州地区と「台湾総督府にて博愛医院設立を計画する南支地方を除いた支那大陸の重要地点に順次医院を設立する計画を樹て」（93頁）、大正5年政府に補助金を申請した。これは、10年間で中国の主要都市33カ所に病院を設立しようとするもので、「医院設立十年計画」と呼ばれたが、その実現の先にはさらに30カ所の設立が予定されていたという。しかし、この計画で実現を見たのは大正12年1月開設の漢口同仁医院のみで、その他は資金不足を主な理由として開設には至らず、その後は居留民を多く抱える上海での設立が一大懸案となった。

上記計画とは別途の理由から病院の設立が実現したのが、青島と済南の場合である。青島の病院は、もとはドイツ人が経営していたものを第一次大戦で日本軍が同地を占領した際に接收して陸軍病院として使い、守備隊が撤退した後は外務省の管轄となり、一時期同地の居留民団の経営するところとなったが、それが大正14年4月に同仁会に移管された。また済南の病院は、大正4年に診

療所として始めたものを徐々に拡張し、青島と同様、守備隊が撤退した後の居留民団の経営を経て、大正14年4月から同仁会の経営に移った。こうして、大正年間までに同仁会は四つの病院を中国内で経営することになったのである。ところが「日本内地には未だ一つも診療機関が無」く（115頁）、次第に在住が増える中国人に医療面に対応できないでいる状況を打開しなければとの声が高まり、満州事変が起った翌昭和7年東京神田の本部事務所内に診療所を設置し、昭和11年にはその近くに新築独立させて、同仁会東京医院を名乗った。

これまでもっぱら病院開設に関する経緯を追ってきたが、同仁会の活動としては他に臨時に医療救助が必要になった際に出動する「救護事業」があった。その最初の出動は、明治44（1911）年秋に起った辛亥革命の際で、革命軍と清朝軍の武力衝突のさなか、既に中国各地に派遣されていた医師のみか、本部からも救護隊を編成派遣して、負傷者への治療を行った。また、大正14年から翌年にかけての第三次奉直戦争の際には、済南市周辺の戦闘での負傷者救援を中国側に要請されて済南同仁医院が対応し、さらに、昭和6年の揚子江流域の大水害や翌年の満州北部の水害に際しても援助を行った。これらは、人災ないし自然災害に対する国境を越えた人道的支援といえるものであるが、それとは別にもっぱら居留民救助のための出動もあった。昭和2年の漢口事件や翌年の済南事件の際の動きはそれに該当するものであり、出動した軍隊の指揮下、日本人負傷者の治療に専念した。そしてその後の救護の活動はますます日本軍の行動に寄り添うものとして展開され、それが同仁会の主要な仕事になっていくのであるが、それについては後述する。

同仁会が重視した活動の一つに中国人医療関係者の育成がある。時間がさかのぼるけれども、明治39年2月早稲田大学の校舎の一部を借りて、東京同仁医薬学校を開設した。これは、中国人留学生で医学、薬学に志すものを教育する目的で開いたもので、同年にはまた、この学校の付属事業として、神田に清韓語学研究会を設けて、同仁会から朝鮮、中国方面への派遣を希望する医師、薬

剤師、助産婦、看護婦に対して、朝鮮語、中国語を教えた。翌40年には、学校、研究会共に牛込に移転し、学校は規模を拡大して「斯会の権威者40数氏を講師に招聘し」、前後両期生約百名を募集、日本人学生も収容した。さらに、同年中に学校付属早稲田同仁医院を新築して診療を開始した。しかし、開校して5年目の明治44年に閉校せざるを得なくなり（研究会は41年に中止）、在校生は千葉、金沢等の医学専門学校に移した。閉校の原因は「財政意の如くなら」なかったからとするが（172頁）、この学校の実態については、不明な点が多く、その説明は今後の課題のひとつである。

昭和期に入ると、日本留学の中国人医薬学生との親睦を計る目的で、東京周辺に在住する留学生を対象にして「留日中華民国医療学生懇話会」と称する集まりを、2年から毎年2回開き5年からは日本の医学生も参加して「中日医薬学生談話会」と改称した。また「中国人医師の学術補修を目的として同仁会医院の所在地において年々開催する」（187頁）「中華民国医師講習会」も昭和2年から始めた。

中国側の医学校、薬学校、病院等との関係を密にするため、その手始めとして日本に留学した中国人医師、薬剤師及び留学中の学生の情報を集めて、やはり2年から『日本留学中華民国医薬学生名簿』を発行し、毎年改訂版を作った。中国における医学校運営も試みられ、大正13年から昭和2年までは青島医学校が開設され、昭和16年以降は青島東亜医科学院が開かれた。

さて、昭和6年に満州事変が起ったことで「本会の蒙った打撃は頗る大きく」、医師講習会等の日中医学界の連絡提携に関する事業は中止し、「在支各医院の事業は緊縮方針を執るの止むなき状態」となったが、「昭和9年頃から、支那大衆の対日感情は漸次緩和し」「各医院の患者数も増加して」きた。しかし、昭和12年の盧溝橋事件以来戦線は拡大して、「同仁会も亦絶大なる影響を蒙りて」北京医院は公使館区域に避難しあとの3病院は日本に引き上げて、「在支医院が診療を中止するは勿論、本部に於ける爾余の事業も一時殆ど中止の已むなきに立至った」。まもなく、戦

乱で医療が行き届かない状況下中国人住民に種々の病気が発生し、それに対応すべく同仁会としては、四つの病院の職員をすばやく現地に復帰させ、特に漢口、済南、青島各医院の職員は診療救護班を編成して再び中国に渡るや、「皇軍の指揮下に入って各地に転出し、支那大衆の診療救護に当って宣撫事業に協力した。」さらに翌年以降、「皇軍の占領地域の拡大するに従ってその重要地点に各々診療班を送り、防疫処を設け、衛生研究所を興し、医学校を経営する等本会の事業は累年拡充し」「其の地域も支那本土のみならず北は蒙疆より南は海南島に及」んだ。そしてこのような変化を『四十年史』は、同仁会は大東亜戦争を契機として「換骨脱胎、蛹が蝶に孵った以上の変化を敢へてした」、「事変前の35ケ年に比較して量的にも質的にも数段の飛躍を遂げた」と述べているのである（以上、207～9頁）。が、日中戦争期に至って「数段の飛躍を遂げた」のは何も同仁会の活動に限ったことではなく、その他の文化領域の活動しかり、各地の居留民の取り組みしかりであり、数年後の敗戦を迎える際に飛躍と思えたものの内実が問われることになるのも、同仁会に限られたことではなかった。

これまで、同仁会の活動の主なものを取り出して日中戦争に至るまでの動きを概括的に述べてきたつもりだが、指摘すべきことで抜け落ちている点がいくつもあるに違いない。その幾分かを補うとすれば、次のようになる。同仁会の活動内容を担ったのは医療関係者に違いないが、それを財政的に支えたのは前半においては会員からの寄付金であり、結成時から精力的に全国各地に支部を作っていき、大会や支部長会合を開いては会の意義を確認しつつ会員数を増やして、大正12年末の会員総数は3万8千余、寄付総額は2百万6千円余にのぼった。しかし、第一次世界大戦後の経済恐慌で寄付金が減り、大正12年秋の関東大震災後は「支部の活動は殆ど終止したと看做していい」（67頁）状況となった。それに代わってというべきか、大正7年からは国庫補助を受けるようになり、12年には外務省の対支文化事業に組み込まれて、その前後から毎年のごとくに国庫補助を得て（この点は、『四十年史』に載る年表「要務年

次誌」で確認できる) 財政を支え、事業の拡大を図ることになる。そして、昭和期に入り日中間に緊張の度合いを増すにつれて、日本軍による武力侵略に医療の面からの補完の役割を担い、日中戦争になるとその役割はピークに達した。やがて指導官庁が外務省から興亜院となり更に大東亜省に代わって、昭和19年には中国に関わる諸団体を統括するものとして新たに日華協会という組織を作ることが考えられ、その中に同仁会を含んで指導管理の強化を図ろうとしたようであるが、まもなく迎えた敗戦の現実の前に机上の空論と化した。敗戦前後、さらに解散時の同仁会の様子については、筆者にとって今後調べるべき課題である。

もう一つ補うべきものとして「出版事業」があるが、それについては2で述べることとする。

2. 同仁会の出版事業

同仁会は、創立して4年目から定期的に雑誌を発行し、数年間出さなかったことが2度あるものの、同時に1種ないし2種の雑誌を発行して昭和19年末まで至った。情宣活動に相当に力を入れた表れといっていゐであろう。以下、それらの雑誌について発行順に簡単にコメントすることにする。

(1), 『同仁』, 月刊, 明治39年6月, 第1号~大正5年11月, 第¹²⁶~~129~~号

第1号のトップに「発刊の辞」がある。雑誌を発行するに当たっての志が述べられているので少しく触れると、まず、西洋人は東洋人より科学知識が優れ開発が進んでいるために「優勝の民族」とし、東洋人は「劣等の民族」と品定めされているが、日本人は開港を余儀なくされて以降西洋の科学をあらゆる面で咀嚼し力をつけ、その真価は今回の日露戦争によって十分に発揮された、と述べている(この戦争が終わったのは、『同仁』発刊の前年のことだった)。そして、日本がロシアを「満州に掃討」したのは、彼らが満州を占領するのは「東洋永遠の平和に大害あり」と考えたからであり、「東洋の平和を確保し東西文明の調和を

成就せんと欲せば尚ほ幾多の大難を平和的に」解決しなければならない。「蓋し我が国が東洋に於ける今後の位置は東亜諸国、就中伶俐にして温順なる四億民庶を有し豊穰なる五百万方里の土地を有せる清国人民の現状を維持し之を開発し之を教導するに」ある。我々が「此の大任に当らんと欲するはあに唯だ同文同種たる清国人に文明の幸福を与へんと欲する私情と謂はむ、又た実に清国人を開発し清国半開の人民をして泰西諸国民に理由なき危害を加ふる不幸を一日も速やかに滅却せんとする」ためである。ところで「清国開発の任務固とより少なからず」あるが、「清国国民に最も欠乏せる医術衛生に事業を普及し個人の病苦を除き衆庶の福祉を進歩し疫癘を予防し天然痘を撲滅し、而して日進医学に達せしむるは急務中の最大急務と謂はざるべからず」と続けたあとに、まとめとして次のように言う。「我が『同仁』は渺たる一小雑誌に過ぎずと雖も其の発念の真諦は此の平和的文明の大主義を鼓吹するの微意に出づ。」この「発刊の辞」がそうであり、そのすぐ後に続く大隈重信の「清国開発の第一義」その他の文章もそうであるが、いずれも中国に対する並々ならぬ関心が述べられているのは、1でも触れたように、同仁会の活動は実のところ「清韓其他亜細亜諸国」という広がりで見られたのではなく、狙いは中国にあることを明らかにしているのである。

1号には他に、会としてその時期に取り組んだ内容を紹介する「同仁会録事」、中国や韓国に派遣した医師の現地報告である「海外通信」、寄付をした者の氏名を並べた「同仁会寄付」などが載り、その後の号にも引き続き載っていくのであるが、最初の数号にある同仁会の役割等を論じた文章が次第に中国や韓国での医学事情を紹介するものにとって代わり、そのみか中国国内の政治、社会情勢を論評する文も載るようになり、とりわけ明治44(1911)年12月発行の67号以降の号数には、辛亥革命に関する情報や同仁会が救護隊を派遣した様子が詳しく報告されている。そして、それ以降の号でも中国の情勢の変化やそれに対する日本を含む各国の反応を多くのスペースを割いて論じていて、一見して医学を専門とする団体の

機関誌とは思えぬ内容である。

ここで、筆者の興味に従って中国人日本留学関係の記事を拾うならば次のごとくである。この雑誌の創刊とはほぼ同時期に開校した東京同仁医薬学校については、1号に「招募清国留学生」と題する広告が載り、その後も飛び飛びに広告が載る外、2号に山口秀高「清国開発と同仁医薬学校」、28号の「同仁会記事」に「同仁医学校の拡張」と題する文が載っている。前者は、台湾で医学校の設立と運営に関わった筆者が書いたもので、「同仁会はあらゆる手段を以て清国の文化に貢献すると同時に東洋の平和を確保し、而して間接には日清貿易の隆盛を期するが故に、先づ文明の先鋒たるべき医術を以て之を清国に普及せしめんと試むるものである」と述べ、それゆえこの学校を創立して清国学生を養成することになったと続けているのであるが、清国文化への貢献などの理念に「日清貿易の隆盛」という現実的要請が加わっているところがおもしろい。後者は、創立2年半を経て翌年には第1回卒業生を出す状況にあるとき、それまで清国留学生のみを収容したのを改め、規模を拡大して女子を含む日本人学生も収容して9月の新学期からは前後期各百名を募集することにした、付属で開いていた清韓語学の講習は終了したが、近い将来「農工商業何人を問はず、事に清韓に従はんとする者のために」再開したいと書いている。しかし、そこには留学生の実情は触れておらず、何ゆえの規模拡大なのかははっきりしない。さらに、36号の「同仁医学校卒業式」は第1回卒業式の様子を伝えているが、明治44年の閉校した時期にはそれに関する記事は見当たらず、この学校についての事実の解明は残されたままである。

但し、当時の医学以外の中国人日本留学に関する情報が時々載っているのは参考になる。例えば、6号から18号まで「留学生学校」と題して、当時留学生を受け入れたばかりの10数校における留学生の勉学ぶりを生き生きと描写している（うち、12号は未見）。6号東京警監学校、7号実践女学校、8号早稲田大学留学生部、9号東斌学校、10号東洋大学日清高等学部、11号東京同文書院、13号法政大学、14号振武学校、15号光武学校、

大極学校—この2校は韓国留学生を受け入れている—筆者、16号高等警務学堂、17号女子美術学校、成女学校、18号宏文学院。また、従来余り知られていない海軍留学生に関するミニ情報もある。35号、43号、59号など。

なお、この雑誌は大正5年11月の126号をもって停刊されたが、それについての説明はその号にはなく、『四十年史』には、当事者の意向で一時的に中止したとあるのみである。

(2), (第2次)『同仁』, 大正11年3月~13年末

筆者未見につき、『四十年史』に従うと、(1)の『同仁』と同じ趣旨で月刊として始めたが、関東大震災後の12年10月号から季刊に改め、13年末に休刊したとのこと。

(3), (第3次)『同仁』, 月刊, 昭和2年5月~¹⁴13年5月。発行月に従い、昭和2年は5月号~12月号とし、それに第1巻第1号~8号と総称番号をつけている。翌年から1年ごとに第2巻、3巻・・・、最終号は第13巻第5号。

昭和2年になぜ3度目の『同仁』が誕生したのかといえば、同誌の創刊号(1巻1号)に載ったいくつかの文章中にその答えが見出せる。その一つ、当時の会長内田康哉の「医院長会議席上に於て」によれば、同仁会経営の各医院長を招集した会議には外務省のお歴々も出席していることを述べると共に、その年以降着手するものとして機関誌の発行を含む五つの新事業を列記しており、また外務次官の出淵勝次の挨拶中には、先に外務省は青島と済南の二つの病院の経営管理を同仁会に委託したことに触れつつ、病院の経営には多大な資金を要するがゆえに外務省としても出来るだけの援助をすると述べた上で、「本会の事業が国際上極めて重要な意義を有する事業なることに想到せられ、十分努力して戴きたい」とハッパをかけている。さらに、日華学会理事山井格太郎は「『同仁』の更正を祝す」において、「同仁会の支那に於て経営せる事業が近年著しく発達して最早同会の機関雑誌たる『同仁』の休刊を許さない事情に立至った」と述べている。つまりこれらを総合すると、外務省のてこ入れを得て大正年間から

多額の国庫補助を受けており、昭和に入って日中間の外交関係が緊張を増す中で同仁会の果たす役割が一層重要性を帯びてきて、その認識が『同仁』の再々度の発刊を促したということになる。

雑誌の中身は、『四十年史』に従うと「支那大陸に於ける医事衛生を中心にその人情、風俗、習慣等を吾が国に紹介し、隣邦支那に対する我が国人の関心を昂むることに努めた」とする(195頁)。筆者としては、多量にある誌面を十分に読みこんでいないので、確かなコメントは今は控えたいが、ざっと目を通した限りでも、このコメントにあるごとく中国内部の医療事情に関する研究ないし観察のレポートがたくさん載っており、医療面からの「支那通」が排出したことを感じさせるものがある。しかし、医療とは関わりない「支那通」による中国紀行も多数載っており、また、当時の中国文学事情についての詳しい紹介や作品の翻訳も載っていて、今の中国文学研究者にとっても参考になりそうな情報が提供されている。さらには、刊行開始の昭和2年には漢口で租界を回収しようとする中国人の運動が起こり、翌年には済南で北伐軍と日本軍との衝突があつて、居留民を含め双方に多数の死傷者が出る事件が起こったが、このように中国各地で日中関係が極度に緊張する事態が次々に発生した際に、同仁会周辺の人々がどのように対応したのかが誌面にさまざまな形で反映されている。(1)の『同仁』では、会結成後10数年間の取り組み状況を具体的に知ることが出来るのに対して、今回の『同仁』は、会の事業を拡大しつつ次第に日本軍の中国各地での侵略行為に根こそぎ動員される事になる、その初期の動きや考え方を見ることが出来るだろうと思う。

ここで、中国人日本留学に関する記事を拾うと、まず、1巻2号から始まって時々「留日中華民国医薬学生懇話会」についての記事が載っているのが目に付く。これは、独自の医薬留学生養成機関を持たなくなって久しい同仁会が、日本各地、とりわけ東京周辺で医薬を学ぶ中国人を集めて影響力を発揮しネットワークを作ろうとした動きであり、同時に始めた『留日医薬学生名簿』の編集と共にかなりの熱を入れて取り組もうとしたことが、当初の数号の記事から読み取れる。この会は

3年後からは日本の医学生も加えて「中日医薬学生談話会」と改称して引き続き年に2回講演会や親睦会を開いていることが時折の記事で報じられているが、10年続いた取り組みも日中戦争が起こることで一頓挫するのである。他には、3巻11号に中華民国留日学生監督姜琦「中華民国留日学生会館建築意見書」が載っている。これは、個人の資格で外務省文化事業部の部長宛に提出したものと断っているが、当時日本が対支文化事業を展開して留学生の学費の一部を補助しつつある現状を踏まえて、さらに留学生のための会館をつくってほしいとの要望が中国側にあったことを示しているのであろう。しかし、この意見書が書かれて2年後に満州事変が起き、そのまた7年後(昭和13年)に「満州国」留日学生会館は出来たけれども、姜琦の希望した中華民国の留学生会館は実現することはなかった。また、10巻6号に「他山の石」と題して中国人の文を3篇紹介しているのは興味を引く。日本が対支文化事業を始める際の基金とした同じ義和団賠償金を使って、イギリス、アメリカは中国に対してどのような文化事業を展開しているかを述べた「庚子賠償金による英米の文化事業」、日本への医学留学生派遣にいささかの疑問を呈している「医学留学生派遣について」、日本は中国に対して文化事業を積極的に進めようとする一方で「武化事業」を行いつつあると指摘している「日本対華文化事業の積極化」がそれであるが、日ごろ良くも悪くも日本人の中国観察で占められている誌面にこのような中国人の辛口の見解を載せるのはまれなことである。

さて、昭和12(1937)年7月に盧溝橋事件が起こって戦線が拡大の一途をたどるや、その直後の11巻9号からの誌面はそれにはいかに対処したか、今後どう対応すべきかに重点が置かれているが、さらに12巻8号になると、その巻頭言「雑誌内容の改革に就いて」に「本号から断然雑誌の内容を革め、もっぱら本会の有する各機関が直接調査研究して得たる資料を掲載して、支那の医事衛生に対する朝野の理解に資する」と述べているように、それまでの構成とはがらりと違う内容が盛られており、なお13巻5巻に至って「宣言」と題する文を載せて、今後「大陸の医事衛生に関

する調査研究の発表に専念し、其の名も」『同仁会医学雑誌』と改題せんとする」と述べている。日本人の中国に対する関心の薄さを啓発すべく、機関雑誌の範疇を越えてこれまでもろもろの内容を載せてきたのをここで終えるというわけである。なぜか、その一つの理由は、「支那事変起こり、大陸に対する我が国人の関心は最高潮に達し、新聞雑誌等何れも大陸に関する記事を満載して遺漏なき有様」だからである。

(4), 『同仁医学』, 華文, 月刊, 昭和3年6月～昭和13年5月

筆者未見につき『四十年史』に従うと、始め『同仁会医学雑誌』と呼んだが、のちに上記のごとくに改名した。内容は「日本の各種医薬学雑誌から其の粹を抜いて支那文に翻訳したもので、此の種の文献に乏しい支那の医薬学界に貢献するところ頗る多」かった(196頁)が、日中戦争が起こった翌年に廃刊された。なお、この雑誌が発行されるたびに(3)の『同仁』がその目次を紹介しているので、専門家であればそれを見て内容を類推することができるかもしれない。

(5), 『同仁会医学雑誌』, 月刊, 昭和14年6月, 第13巻6号～昭和19年12月, 第18巻12号。巻数は(3)の『同仁』の後を継いでいるが、呼び方は昭和を使わずに「皇紀」を使い、例えば13巻6号は紀元二千五百九十九年六月号としている。

この雑誌の創刊号というべき13巻6号には「改題宣言」があり、そこには「時局は進展して大陸は今や建設の過程に入り、我が同仁会はその医事衛生方面を担当するに至った。従て本会の機関雑誌も亦大陸医学衛生の指導を以て任ずるの要あり、茲に題号も『同仁会医学雑誌』と改め」とある。そして、この号から1年間ほどは「同仁会報」とか「同仁会記事」と題して会の情報が載り、長大な旅行記も連載されているが、そのあとの号には全て医学の専門的内容が載るだけである。早稲田大学図書館所蔵分を見ただけなので、その後続いて出たかは未確認である。

(6), 『同仁会報』, 不定期刊, 昭和15年8月,

第1冊～昭和19年9月, 第18冊。発行の間隔は、当初はほぼふた月だがあとには三月となり、最後は5ヶ月となった。第18冊に終刊を告げる言葉はなく、これで終わったかは未確認。

内容は、医学関係に限定されていない点では(3)の『同仁』に近いが、執筆者の殆どが中国のどこかの地区に配属された同仁会関係者であるためか、話題はローカルでこじんまりとした仕上がりになっている。また、各号に、班とか処、例えば保定診療班とか青島防疫処とか言う中国各地に配置した部署からの報告である「班処通信」、(3)の『同仁』や当初の『同仁会医学雑誌』にも載っていた「同仁会記事」が引き継がれかつ詳しい内容で書かれているのが、この雑誌の特徴といえそうである。その意味で、名前のとおり同仁会の「会報」であり、とりわけ戦時下に命をかけて働く同僚に関する情報を載せ、不幸にして犠牲になった同僚を痛む文を長々と載せているのである。

以上、少しは目を通したものとまったく見ていないものを含めて、同仁会が発行した6種類の雑誌についてコメントした。最初にこれらを読んでみようとしたのは、これらの中から中国人日本留学に関する情報を得られるのではないかと思ったからだ。それは見込み違いであった。しかし、拾い読みをするうちに、ここには明治期の日本人が医療を通じていかに中国と関わって日中戦争時期まで至ったのかを語っている証言が豊富に残されており、同仁会の歴史を通じて近代の日中関係を考えることができるのではないかと感じた。そこで、筆者としては急がば回れで、まずは目次を整理して公にし、興味を覚えた人を誘って一緒に読みながら、近代以降の日本人が中国に向かったさまざまな有り様を考える事にした。いくつか拾い読みをしたうち、(1)の『同仁』は2号分を見ることができず、(2)と(4)は未見、(5)は医学専門雑誌であるので敬遠し、全部の号を見ることができた(3)の『同仁』と(6)の『同仁会報』についてだけ目次を整理して、それを3に並べることにした。この2種の雑誌が発行された時期は昭和2年から19年までにわたっており、

それは昨年日次を整理して本所報No.38に載せた『日華学報』が発行された時期とはほぼ重なっていることから、今後『日華学報』の内容と比較しながら読むのにもこの目次が役立つだろうと思う。

3.『同仁』、『同仁会報』目次

最初に2, 3の断りをする。両雑誌とも基本的には各号の目次に拠ったが、号によっては本文にあつて目次に載らないものがあるので、それを追加し、連載ものについては付していない回数を加えたりして、見やすいものになるように心がけた。原文の旧字体は、氏名を除いて新字体に直した。『同仁』は北海道大学図書館、『同仁会報』は早稲田大学図書館所蔵のものを閲覧し、後者の欠号分は東京大学東洋文化研究所図書室所蔵のもので補った。目次をこのような形で整理できたのは、北海道大学川島真氏、本学中国語学科卒業生小川博子さん、中国言語文化研究科修士修了三田裕子さんの協力があつてのことである。記して感謝する。

同仁

第1巻第1号（昭和2年5月号）

表紙	同仁会漢口医院本館正面	
同仁会総裁久邇宮邦彦王殿下御親筆		
写真	記念撮影於久邇宮邸	
令旨	昭和2年3月25日於総裁宮邸	1
同仁会医院長会議席上に於ける挨拶		
	同仁会長伯爵 内田康哉	2
同席上に於ける口演	外務次官 出淵勝次	4
同仁会の現状及将来に対する希望		
	同仁会副会長 江口定條	6
雑誌「同仁」の更生を祝す		
	日華学会理事 山井格太郎	9
支那人の衛生法と日本人の衛生法（1）		
	日本赤十字社奉天病院長 小川勇	10
倭村漫筆 韓退之 鄭成功		
	医学博士 入澤達吉	14
国际上より見たる我国の医事衛生	莊司秋白	20
中華民国に於ける医薬及売薬に関して		

同仁会済南医院薬局長 有馬晋吉	22
漢口通信（動乱と同仁会医院）	30
支那旅行日誌（1）	小野得一郎 45
会報	42
同仁会事業大要 各医院概況 同仁会の新規事業 中華民国医師講習会 同仁会医院長会議状況 同仁会評議員会議事の概要 人事消息	
昭和2年1月以降4月に到る本会の重要事項	
談叢	一記者 62
小説 旅人	加納幽閑子 63
同仁歌壇	67
編輯室より	68

第1巻第2号（昭和2年6月号）

表紙	同仁会北京医院本館正面	
口絵	北京万寿山昆明湖畔 同仁会本部に於ける南満医学堂見学団民国学生招待会	
朝野の各位に告ぐ	伯爵 内田康哉	1
同仁会の使命	有賀長文	2
創刊を祝して所感を述ぶ	野呂寧	3
同仁会の既往	小野得一郎	6
日本留学中華民国医薬学生懇話会		
次第		12
開会の辞	小野得一郎	13
同仁会の事業に就て	医学博士 入澤達吉	14
日支医学の提携	医学博士 稲田龍吉	16
学生諸氏の爲に	医学博士 林春雄	18
同上	吉岡弥生女史	20
謝辞	熊俊	22
支那人の衛生法と日本人の衛生法（2）		
	日本赤十字社奉天病院長 小川勇	24
倭村漫筆（続）閩江 金陵		
	医学博士 入澤達吉	28
心外録 念写縦横論 歌女能唱曲乎		
	中国米年幾多 莊司秋白	33
支那旅行日誌（2）	小野得一郎	36
文化事業の独立		43
同仁会医院通信		44
	北京医院 漢口医院 済南医院	
会報		50
4月20日以降本会の重要事項、各医院の必需品委託購買の状況、四月分各医院患者表、昨年度		

中に於ける寄付金収納額、支那動乱と本会の慰問

漢口見聞記	中村大三	55
埋められた銀	加納幽閑子	58
新緑抄 俳句		62
同仁歌壇		63
編輯たより		64
同仁会の目的事業及役員		65

第1巻第3号(昭和2年7月号)

表紙 同仁会青島医院本館正面		
口絵 6月7日本会に於ける理事会 万里の長城(八達嶺)		
卷頭言 支那時局と本会事業		1
日支の共存共栄を実現せよ 井上敬次郎		2
同仁会事業と支那の時局		
医学博士 岡田和一郎		4
支那人の衛生法と日本人の衛生法(3)		
日本赤十字社奉天病院長 小川勇		9
倭村漫筆(続)黄河 聖林		
医学博士 入澤達吉		15
心外録(続)中華名産黒蛋 瓜子兒的効験		
莊司秋白		19
漢口動乱に直面して 安西金平		21
支那旅行日誌(3) 小野得一郎		25
天佑 野原英麿		30
済南地方診療異聞 甲田半		33
同仁会医院通信		35
北京医院 漢口医院 青島医院 済南医院		
会報		36
5月23日以降本会の重要事項 同仁会理事会議 事の概要 五月分各医院患者表		
彙報		40
樹の霊 秋澤次郎		42
盧生の夢 凌霄花		44
同仁俳壇		48
同仁歌壇		49
資料 支那に於ける欧米人の文化事業		50
中国訳文		52
留日中華民国医業学生懇話会		
同仁会之沿革及目的事業		
編輯たより		63

同仁会の目的事業及役員

64

第1巻第4号(昭和2年8月号)

表紙 同仁会済南医院本館正面		
口絵 香山双清別墅前庭に於ける日支名士の会合 日本駐在中国公使汪榮宝氏と筆蹟		
卷頭辞 此意気此決心		1
支那人と医療 長野朗		2
時局に直面せる同仁会事業に対する批判		
同仁会当事者に希望す 内藤久寛		5
功を百年に期せよ 国分三亥		6
断じて撤退するな 内ヶ崎作三郎		7
同仁の二字を赤十字旗と心得よ 宮本仲		8
支那人の衛生法と日本人の衛生法(4)		
小川勇		9
杏林桃窓 安岡正篤		19
倭村漫筆(続)青島 入澤達吉		21
杏林偉人小伝(1)橋本綱常氏 長尾藻城		23
小山田侍従武官奉迎印象記 漢口 野原英麿		26
支那旅行日誌(4) 小野得一郎		28
支那の医事衛生を婦人の双肩に 吉岡弥生		37
おみくじの処方箋 北京 白賁生		39
明代稗話 緑衣の女 凌霄花		42
青嵐抄 同仁俳壇		47
同仁歌壇		47
同仁会医院通信		49
済南医院 青島医院 北京医院 漢口医院		
会報		53
6月15日以降本部並各医院に於ける重要事項		
人事異動 6月分各医院患者表		
彙報		57
同仁会寄付行爲 付中国訳文		59
奥付		64

第1巻第5号(昭和2年9月号)

表紙 同仁会青島医院付属医学校		
口絵 於同仁会北京医院正面 同仁会済南医院搾乳場の一部		
卷頭辞 支那へ支那へ		1
支那の現状 芳澤謙吉		3
対支医療事業の前途 長野朗		9
同仁会に対する希望 野呂寧		15

整形外科を紹介す	田代義徳	17
支那人の衛生法と日本人の衛生法 (5)		
	小川勇	21
医師の心理と患者の心理	遠山椿吉	27
随聞随筆 大哉食乎	唯壁居人	29
杏林偉人小伝 (2) 佐藤尚中先生	長尾藻城	32
医者の随筆	楠瀬日年	35
土豪劣紳の引回はし		38
資料 支那に於ける欧米の文化事業 (承前)		40
虎になった人	凌霄花	43
同仁歌壇		49
会報		

7月20日以降本会に於ける重要事項	50
人事異動	51
支部役員囑託	51
7月分各医院患者表 青島医院	52
同仁会医院通信 青島医院	53
彙報 極東熱帯医学会 陸軍衛生部員青島派遣	
東大学生支那見学 上海地方のコレラ 上海の	
自然科学研究所 同仁会済南医院職員より贈呈	
せし慰問袋 本誌通信主任の囑託	55
同仁会寄付行為 (付属規程) 会員及会員章規程	
同仁会支部規程, 同上中国訳文	57
同仁会之沿革及目的事業	63
奥付	64

第1巻第6号 (昭和2年10月号)

表紙 同仁会済南医院新築病棟の一部	
口絵 於同仁会済南医院前庭 北京正陽門外	
卷頭辞 山極博士の提案	1
最高意義に徹する同仁会事業	秋澤次郎 2
支那の動き	莫愁楼主人 4
肋膜炎の話	小川勇 9
民国に於ける癌の調査に就て	山極勝三郎 21
杏林桃窓 (4) 胎性如何	安岡正篤 23
倭村漫筆 (続) 広東	入澤達吉 27
杏林偉人小伝 (3) 松本順先生	長尾藻城 30
乞食礼賛	瀧田伊平 33
民国の長老趙爾巽の死	35
煙館一瞥	双山楼主人 36
金風抄 同仁俳壇	40
同仁歌壇	41

小説	
胡媚娘	凌霄花 42
真昼	金森多可夫 47
会報 8月15日以降の重要事項 8月分患者表	
人事往来	51
医院通信 漢口医院 青島医院	54
彙報	55
北京交民衛生試験所沿革, 同上中国訳文	56
その日草	墨堂 58
同仁会の沿革及目的事業	62
奥付	63

第1巻第7号 (昭和2年11月号)

表紙 同仁会北京医院施療所の一部	
口絵 於天津段祺瑞氏邸	
致仕有作 (医学博士入澤達吉氏)	
卷頭辞 太平洋会議と支那問題	1
日支親善と同仁会事業	小豆澤英男 3
支那国民性のいろいろ	長野朗 8
肋膜炎の話	小川勇 14
猩紅熱と其の治療血清に就て	秋山猛 23
丹波薬学博士を弔す	31
雲南に於ける医療事業	莫愁楼主人 32
杏林桃窓 (5)(6)	安岡正篤 34
随聞随筆 (2) 医師か医工か	唯壁居人 36
東京帝国大学医学部学生支那旅行記	39

(一) 出発までに (二) 青島に向う

(三) 青島の街 (四) 支那料理 (五) 苦力

(一) 守屋博 (二, 三, 四, 五) 松田勝一

資料 支那に於ける医学校	48
深秋抄 同仁俳壇	52
同仁歌壇	53
会報	
9月10日以降の重要事項	54
人事, 異動, 往来	54
9月分各医院患者表	55
医院通信	56
派遣軍隊を迎へたる当時の済南 済南医院に	
収容せる軍隊の患者 済南医院集談会開催	
漢口医院長武正博士の書翰 山東地方の悪	
疫と同仁会医院	
中国医師講習会	58

講習日程並同科目、講習会要領	
彙報	60
中華民国医薬学生秋季懇話会	61
故山内崑氏の一周忌	61
その日草	編輯子 62
奥付	65

第1巻第8号（昭和2年12月号）

表紙 同仁会青島医院第二病棟の一部	
口絵 中国医師講習会記念撮影（於青島医院）	
同仁会済南医院職員の乗馬会	

巻頭辞 昭和2年の回顧	1
滿蒙奥地の医療施設に就て	尾池禹一郎 3
恩師山極先生の癌の『テーマ』に就て	牧野融 8
青島に於ける医療機関	廣瀬徹夫 13
学生の排日	15
中華民国医薬学生秋季懇話会	
挨拶	小野得一郎 16
謝辞	金子直 18
口演	秦佐八郎 19
同	岡田和一郎 20
挨拶	稲田龍吉 23
口演	田代義徳 24
同	松本高三郎 26
謝辞	李祖蔚 27
同	載神庇 27
同	熊俊 28
中華医薬学会々員招待	29
杏林偉人小伝（4）長与専斎先生	長尾藻城 31
随聞随筆（3）医師の精神的権威	唯壁居人 34
故丹波博士を懷ふ	小野得一郎 38
東京帝国大学医学部学生支那旅行記	
（六）青島の一夜	鈴木重大 40
（七）李村行	平山勝司 41
（八）支那見学旅行漫記	近藤千樹 43
（九）青島から済南へ	三木威勇治 44
（一〇）済南医院に於ける生活断片	久保久俊 45
（一一）済南の名所を見る	守屋博 48
中国医師講習会記事	52
医院通信 漢口通信 北京通信	54

滞京感想	野原英磨 56
彙報	58
会報	
昭和2年10月15日以降の重要事項	61
人事往来	62
訃報	62
10月分各医院患者表	63
同仁歌壇	64
新刊紹介	65
同仁を回顧して	蘇水 66
奥付	71

第2巻第1号（昭和3年1月号）

口絵 東方文化事業上海委員会総会（於帝国学士院） 中国南京下関馬頭之景	
刊頭辞 昭和3年を迎ふ	1
対支文化事業に就いて	岡部長景 2
支那の将来	長野朗 12
肺結核の話	小川勇 15
漢法医学と吾国の医術	石田保次 26
新年の同仁	野呂寧 30
杏林談叢（地球上の猩紅熱分布と濃度及其説明）	豊田太郎 31
故丹波博士のことども	遠山九鱗 32
支那の正月	羅覚僧 34
張三李四録	故山内崑（遺稿） 37
昭和3年同慶帖	
蘭亭修禊序	禿兵衛 41
資料 本邦在留中華民国人分布表	46
東京帝国大学医学部学生支那旅行記	
（12）北京郊外の見物	山本鉄城 48
（13）八達嶺，十三陵，湯山	近藤千樹 51
（14）天津行	鈴木重大 53
会報	
昭和2年中に於ける本部及各医院の重要事項	54
昭和2年中に於ける本部諸会議	59
同上人事異動	60
彙報	61
同仁俳壇	62
同仁歌壇	63
奥付	64

第2巻第2号（昭和3年2月号）

口絵 青島医院長へ扁額寄贈の光景 総裁宮殿下御染筆（入澤副会長所蔵）	
巻頭辞 医療事業の使命	
日華両国の精神的融合は可能なりや 張準	3
文化事業に対する支那人の思想と同仁会の事業	
	風間阜 6
肺結核の話	小川勇 12
漢方医学と吾医術	石田保次 20
医者不值段	唯壁居人 25
杏林談叢	
飛んでもない盲腸炎	上田春治郎 28
所謂経験	竹林平一郎 29
看護婦の働振りと待遇	阿部龍夫 30
昭和2年吾医界の回顧	莫愁樓主人 31
東京帝国大学医学部学生支那旅行記	
泰山紀行 大井上龍夫 山本欽三郎	35
大連 奉天 登倉裕徳	39
同仁卓上座談（昭和2年12月於東京会館）	43
資料 本邦に於ける医師の分布	48
学費補給中華民国留学生調	50
民国医学者の視察報告	56
会報	
昭和2年12月以降の重要事項	57
人事異動 往来	58
昭和2年12月各医院患者表	59
医院通信 北京医院 青島医院 済南医院	60
彙報	62
詞藻 詩壇／歌壇／俳壇	63
奥付	66

第2巻第3号（昭和3年3月号）

口絵 同仁会医院事務長会議（於本部楼上） 漢口医院設立五週年祝賀（於漢口医院門前）	
巻頭辞 医学と国境	1
事務長会議に際し本誌の希望 小野得一郎	2
肺結核の話（3） 小川勇	4
杏林談叢	
医業の本質と医業の将来 佐々木秀一	14
医業の行く可き途 宮島幹之助	15
医療国営の大勢は止むべからず 湯澤三千男	16

正に更始一新の機 佐藤正	17
広東共産党擾乱記	19
熱河往診記 生島捨次郎	26
倭村漫筆 北京 入澤達吉	35
日本の国花と支那の国花 桜花＝日本、牡丹＝支那 秋澤次郎	38
氣転丸毒下し 唯壁居人	41
資料	
中国医学大会記事	45
北京中央防疫処の概況	48
会報	
本会評議員の囑託	51
日本赤十字社救護事業と本会済南医院の活動	51
北京交民衛生試験所補助金下付	51
同仁会医院事務長会議開催	52
中国医学会大会	53
垂井医長と学位	53
東方文化事業委員の視察	53
漢口医院対田中長次訴訟事件	53
済南医院杉本医長の上海出張	53
済南医院集談会	53
人事異動 往来 訃報	54
昭和3年1月分医院患者表	55
医院通信 漢口医院	56
彙報	58
詞藻 詩／歌	61
奥付	63

第2巻第4号（昭和3年4月号）

巻頭辞 中国文月刊医学雑誌刊行	1
事務長会議に於ける訓示 伯爵 内田康哉	2
同仁会医院事務長に対する希望 子爵 岡部長景	3
支那の南と北 長野朗	5
変りつゝある支那と同仁会の事業 莫愁樓主人	7
同仁会の幹部に懇ふ 上田恭輔	12
肺結核の話（4） 小川勇	15
杏林談叢	
腸窒扶斯と肺結核 近藤見長	22
小児の採血に就て 皆見省吾	23

アネステジン創製者	北村信治	24	満洲医科大学中国学生見学団招待	44
人間製造	松村松年	25	満州医科大修学旅行団の済南、青島医院視察	
支那診療異聞	牧野融	34		44
随聞随筆（5） 医師と政治	唯壁居人	36	済南医院に於ける赤十字救護事業	44
仙薬の話 神仙思想と不老長生	米田華舫	40	済南医院集談会	44
会報			医院通信 漢口医院 済南医院	45
事務長の医院診察		43	人事異動／人事往来／訃報	46
事務長招宴		43	昭和3年3月分各医院患者表	47
同仁会済南医院に於ける赤十字救護事業		43	彙報	48
留日中華民国医薬学出身者名簿刊行		44	詞藻 詩／歌	56
民国留学生に種痘施行		44	同仁会の歌	無着 58
青島医院集談会		44	宣和遺事の一節（小説）	紫楼 51
本会定例評議員会開催		45	編輯室より	60
人事異動／人事往来／訃報		46	奥付	63
昭和3年2月分医院患者表		47		
彙報		48	第2巻第6号（昭和3年6月号）	
小説 涙	吉井勇	51	口絵 同仁会済南医院全景	
詞藻 詩／歌		59	巻頭辞 我等の使命	1
奥付		60	日本留学生中華民国医薬学生懇話会	
			所感	北島多一 5
			民国留学生に対する希望	慶松勝左衛門 5
			年齢別に観たる耳鼻咽喉疾患	細谷雄太 11
			偶感	青江政太郎 14
			真の日本を理解せよ	吉岡弥生 15
			肺結核の話（6）	小川勇 16
			東洋医学の確立を期せよ	辻澤菖水 24
			上田恭輔氏に質す	飯島庸徳 26
			済南の動乱と同仁会済南医院	29
			医苦断片	唯壁居人 33
			資料 国際聯盟保健機関の活動	36
			会報	
			済南医院の活動	50
			同仁会医学雑誌の発行	50
			中華民国医薬学生春季懇話会	50
			本部職員の江の島紀行	53
			青島医院桜会／同院集談会	54
			済南医院看護婦養成所卒業式	55
			昭和3年4月分各医院患者表	56
			彙報	57
			詞藻 詩／歌	60
			東京より	一記者 62
			奥付	65
第2巻第5号（昭和3年5月号）				
口絵 満洲医科大学中国学生見学団招宴				
同仁会青島医院構内桜の通り				
巻頭辞 本会関係者諸賢に懇ふ		1		
同仁会評議員となるに当りて	木村徳衛	2		
医育の現在及将来	田代義徳	4		
支那に対する阿片の害毒防止運動	菊地西治	7		
肺結核の話（5）	小川勇	13		
杏林談叢				
ワイル氏病の経験	松本俊胤	22		
麻疹、予防注射、過信	榎林篤三	23		
油断のならぬ胸痛	横森賢次郎	24		
支那薬草奇談	上田恭輔	25		
何故の医科志望ぞ	唯壁居人	29		
偉い人よりも善い人	福島四郎	32		
武昌遊記	莫愁楼主人	34		
詩は心霊の表現なり	辻澤菖水	37		
日本医学会総会記事 日本内科学会（第25回）／				
日本外科学会（第29回）／日本皮膚科学会				
（第28回）／日本生理学会		40		
会報				
中国文医学雑誌の刊行		44		

第2巻第7号（昭和3年7月号）

口絵 日本留学中華民国医業学生懇話会／景山

巻頭辞 所感一則 1

同仁会漢文医学雑誌序 汪榮宝 3

資本主義の医業に及ぼしたる影響 鈴木直巳 5

仁述の新旧觀念 唯壁居人 13

支那人に多き外耳の疾患 林外男 28

血管病と血圧との関係 田中吉左衛門 31

第32回同仁会済南医院集談会

麻疹の異常経過の数例 荒木三郎 16

痘瘡異常例 伊吹月雄 17

『カラアツアール』に就て 杉本浩三 17

人類下顎過剰歯に就て 井上忠 18

腸『チブス』の予防接種との関係に就て

四方京一 19

肺射創の一例 村上徳治 20

戦時外科一般 牧野融 20

名医葉天士の逸事 上田恭輔 36

資料 山東省産漢薬に就て 小林清治 40

会報

同仁会医学雑誌好評／訳書刊行会 49

同仁会済南医院に於ける日本赤十字救護事業

49

黎元江氏弔問／本会役員会に於ける支那視察談

／医院通信 北京 漢口 済南 50

人事異動 53

人事往來 54

訃報 55

昭和3年5月分各医院患者表 55

彙報 56

詞藻 詩／歌 58

華文同仁会医学雑誌発行之趣旨 60

東京より 一記者 62

奥付 65

第2巻第8号（昭和3年8月号）

口絵 済南医院収容第6師団傷病兵救護状況

青島医院日光浴病棟，青島海水浴場

同仁会の事業精神 小野得一郎 1

列国の対支文化政策 長野朗 3

支那動乱と同仁会事業 禾恵学人 9

戦時外科の一般（承前） 牧野融 12

健康の所有権は何人か 唯壁居人 19

欧米を回顧して（1） 小川玄々子 22

済南余談 通信子 30

時局と北京医院の苦心 通信子 32

資料 国際聯盟保険機関の組織と其出版物

国際聯盟事務局東京支局 35

済南記行 墨堂 44

会報

同仁会医学雑誌8月号発行 49

同仁会済南医院に於ける日本赤十字救護事業／

長与理事の消息／済南医院慰問 49

医院通信 青島 漢口 済南 50

人事／慶事 51

訃報 52

昭和3年6月分各医院患者表 53

彙報 54

北京日記より M子 57

詞藻 詩／歌 61

東京より 63

四行欄 66

奥付 68

第2巻第9号（昭和3年9月号）

口絵 不戦条約調印帝国全権委員本会会長内田伯

同仁会理事会（7月30日於如水会館）

巻頭言 不戦条約の締結 1

事前療法 山口察常 2

日本医学の発達史 方石珊 4

在支日本婦人の覚悟 千鳥女史 10

満州視察余録 長野朗 12

長与博士訪問記 一記者 14

貧乏国民の健康維持費 唯壁居人 16

欧米を回顧して（2） 小川玄々子 21

杏林談叢

支那に於ける猩紅熱の縁起 楊鳳鳴 18

再発せる産褥熱 村上保 18

意外な礼状 大久保九平 19

飛行療法 逸名 20

済南余聞 通信子 24

資料 国際聯盟保険機関の組織と其出版物

国際聯盟事務局東京支局 26

会報

理事会 牧野済南院長並小野理事之報告其他	35	チット・チャット	61
同仁会医学雑誌愛読申込頻りなり	41	奥付	65
同仁会済南医院に於ける日本赤十字救護事業	42	第2巻第11号（昭和3年11月号）	
医院通信 青島 済南	43	御真影	
人事／慶事	44	奉祝の歌	斎藤茂吉 1
昭和3年7月分各医院患者表	45	御大典に際して	田中義一 1
彙報	46	医事衛生の国際協力	鶴見三三 8
詞藻 詩／歌	49	張仲景に就て	米田華舫 18
小説 明代稗話廢寺の怪	凌宵花 51	欧米を回顧して（5）	小川玄々子 21
チット、チャット	一記者 61	泰嶗同筭会記	大村泰男 27
奥付	65	是亦一つの記念事業なるべし	蘇水 30
第2巻第10号（昭和3年10月号）		四季の衛生	
口絵 同仁会北京医院電機治療室及同仁会北京医院看護婦養成所教室／石鼓書院		緒言	入澤達吉 32
巻頭言 支那語学の普及を望む	1	第1編冬の衛生	34
同仁会に対する希望	野呂寧 2	概論	34
中華民国に於ける思想難	太田秀穂 5	暖室法の話	佐々木秀一 35
国民党は何処へ行く	長野朗 8	冬期に於ける看病上の注意	莊司秋白 41
中国医学雑誌論	葉古江 11	会報	
天下を三分してその一を	唯壁居人 19	同仁会医学雑誌11月号発行	51
吉益東洞に就て	墨堂 22	同仁会済南医院に於ける日本赤十字救護事業／	
杏林談叢		同済南医院医学集談会	51
虫を下ろす話	阿部龍夫 25	病院用日華会話書編纂	52
珍奇なる鼻孔異物例	熊谷太市 26	青島医学学校卒業式	52
創傷の入浴療法	泉伍朗 27	人事／訃報／慶事	52
欧米を回顧して（3）	小川玄々子 29	医院通信（北京 漢口 済南 青島）	53
四博士帰朝歓迎会	一記者 38	昭和3年9月分同仁会各医院患者表	56
資料 国際聯盟マラリア委員会の活動		彙報	57
国際聯盟事務局東京支局 栗飯原晋	40	詞藻 詩／歌	60
会報		医界時事	唯壁居人 62
同仁会員と地方餐饌	45	チット・チャット	64
同仁会済南医院に於ける日本赤十字救護	47	奥付	
漢口事件救護事業詳報	47	付録	
医院通信 北京 漢口 済南	47	同仁会事業大要	
人事／慶事	49	第2巻第12号（昭和3年12月号）	
昭和3年9月分各医院患者表	50	乱れたる支那の強味と治まれる日本の弱味	
彙報	51	安岡正篤	1
詞藻 詩／歌	53	日華両国民窮局の願望は何ぞ	王大楨 3
小説 鑑湖夜泛ぶ記	一夢 55	医事衛生の国際協力（2）	鶴見三三 11
		欧米を回顧して（5）	小川玄々子 15
		調査資料 国際聯盟の癩調査委員会	

栗飯原晋	24	同仁会北京医院の御大典記念娯楽部	54
四季の衛生 其の二		中華民国医薬学生第4回懇話会	54
冬期に罹り易い病気と其の手当	豊田栄 28	人事	56
凍傷の予防と手当	賀川哲夫 38	昭和3年度上半期同仁会各医院患者表	57
医界時事	唯壁居人 47	昭和3年度上半期同仁会各医院診療収入調	58
会報		彙報	59
同仁会医学雑誌12月号発行	49	詞壇 詩／歌	61
同仁会済南医院に於ける日本赤十字救護事業	49	医界時事	63
同仁会会員の函簿奉拝	49	チット・チャット	65
青島医院集談会	50	付録	
同仁会関係者の光栄	50	同慶帖	
同仁会会員の御還幸啓奉迎	51		
医院通信 漢口	51	第3巻第2号(昭和4年2月号)	
昭和3年10月分同仁会各医院患者表	54	追悼辞	1
彙報		嗚呼総裁久邇宮殿下	2
阿片条約の適用拡張／京城大薬園竣成／癩予防		故総裁宮殿下と同仁会	7
慶應大学協会設立さる	55	総裁久邇宮殿下の薨去に就て	
米人の医師試験合格／結核虎眼両予防法の改正		同仁会会長 伯爵 内田康哉	8
／日華医薬学生懇親会	57	久邇元帥宮殿下の薨去を悼み奉る	
詞藻 詩／歌	58	同仁会顧問 男爵 田中義一氏謹話	11
チット・チャット	60	久邇宮殿下を偲び奉る	
奥付	62	同仁会副会長 江口定條	12
		総裁の宮殿下を偲び奉る	
第3巻第1号(昭和4年1月号)		同仁会副会長 入澤達吉	15
年頭所感	1	故総裁宮殿下を追悼し奉る	
支那の家族制度	服部宇之吉 2	同仁会理事 岡田和一郎氏謹話	17
支那新聞に現れたる売薬の広告	上田恭輔 3	哀悼の辞	同仁会理事 鈴木梅四郎 18
文化侵略歓迎すべし	山崎百治 14	故久邇宮邦彦王殿下を追悼し奉る	
北京の正月の思出で	泉隣小史 17	元久邇宮々務監督 国分三亥氏謹話	20
欧米を回顧して(6)	小川玄々子 21	かなしみの歌 久邇宮付宮内事務官	
「同仁」は斯くあれと思ふ(1)	石井愛亭 29	山田益彦	24
資料 漢方に関する書籍及び時価(1)		追憶	同仁会理事 小野得一郎 27
	TH生 33	会報	
四季の衛生 其の三 第1編 冬の衛生(3)		総裁宮殿下の薨去	36
冬の食物	島菌順次郎 42	同仁会医学雑誌第2巻第2号発行	37
衛生上より見たる我国の正月	白木武 46	役員定例会	38
会報		済南医院内日本赤十字救護所	38
同仁会漢口医院の御大典記念事業	52	同仁会北京医院集談会	39
同仁会医学雑誌第2巻第1号発行	52	同仁会青島医院集談会	39
支那名画展覽会華国側代表歓迎会	53	人事	40
同仁会済南医院医師集談会	53	昭和3年中重要事項	40
		昭和3年12月分同仁会各医院患者表	46

彙報	47
詞藻 歌／詩	51
資料 漢法に関する書籍及時価（2） T H 生	53
医界時事	唯壁居人 62

第3巻第3号（昭和4年3月号）

卷頭辞 支那の排日と同仁会の事業	小野得一郎 1
所感	姜琦 3
欧米医学界視察談	福士政一 6
阿片問題に関して	菊地西治 11
支那の箭毒	川端柁夫 17
欧米を回顧して（7）	小川玄々子 20
同仁は斯くあれと思ふ（2）	石井愛亭 29
四季の衛生 其の四	32
第2編 春の衛生（1）	
春先きの眼病	小川剣三郎 33
春3月小児の衛生	藤井秀旭 44
会報	

同仁会医学雑誌第2巻第3号発行	53
同仁会済南医院内日本赤十字救護所	53
同仁会漢口医院分院再開	54
訳書刊行委員会	54
湯爾和氏歓迎会	54
人事	54
医院通信 漢口より	55
昭和4年1月分同仁会各医院患者表	59
彙報	60
歌壇	斎藤茂吉選 63
詩壇	辻澤菖水選 64
医界時事	唯壁居人 65

第3巻第4号（昭和4年4月号）

卷頭辞 隣邦医薬界事情調査の必要を提唱す	1
日支親善は精神的なるを要す	上田恭輔 3
エーリツヒ先生に就て	秦佐八郎 13
米国の医界視察団	吉岡弥生 20
阿片問題に関して（2）	菊地西治 25
清朝王族の末路	市吉徹夫 33
欧米を回顧して（8）	小川玄々子 37
梅花の賦	秋澤次郎 39
四季の衛生 其の五	42

第2編 春の衛生（2）

お花見頃の衛生	樫田十次郎 43
婦人体格の改善案	氏原佐蔵 51
会報	
故総裁宮殿下五十日祭	54
役員会	54
同仁会医学雑誌第2巻第4号発行	54
済南医院内日本赤十字救護所の閉鎖	55
理事会	55
南満州医科大学修学旅行団歓迎会	55
新旧文化事業部長送迎晩餐会	56
同仁会北京医院集談会	56
同仁会青島医院集談会	57
人事	57
昭和4年2月分同仁会各医院患者表	58
彙報	59
歌壇	斎藤茂吉選 62
詩壇	辻澤菖水評選 63
医界時事	唯壁居人 64

第3巻第5号（昭和4年5月号）

卷頭辞 青年支那に学べ	田川大吉郎 1
漢医方廃止是非（1）	米田華缸 3
支那のルネサンス	アーサー・ソワビー 7
思ひ出すまゝ（1）	虚心窟主人 12
己巳年東遊雜詠	爾叟 15
人參採りの話	北條太郎 19
欧米を回顧して（9）	小川玄々子 23
食用の花	雲外居人 28
四季の衛生 其の六	30

第2編 春の衛生（3）

睡眠の話	医学博士 福田得志 31
腸空扶斯の個人的予防法	医学博士 村山達三 37
新旧医学の衝突（1）	43
仙台市に於ける聯合医学会	50
資料 国際聯盟阿片諮問委員会の活動	
国際聯盟事務局	52
会報	
同仁会顧問後藤伯爵の逝去	57
同仁会医学雑誌第2巻第5号発行	57
済南医院集談会	58

本部職員の清遊	58	医界時事	夢草生	67
医院通信 漢口より	59			
人事	59			
昭和4年3月分同仁会各医院患者表	60	第3巻第7号(昭和4年7月号)		
彙報	61	学生諸氏に支那旅行を勧む		1
歌壇 斎藤茂吉選	64	欧米に於ける人種的考察 医学博士 林春雄		2
詩壇 辻澤菖水評選	65	漢医方廃止是非(3) 米田華舫		14
医界時事 夢草生	66	東西医学と言う觀念 唯壁居人		19
		中国人氏名考 無平学人		21
		支那の思出(3) 虚心窟主人		25
		旅の印象 秋澤次郎		29
第3巻第6号(昭和4年6月号)		歌壇 斎藤茂吉選		32
同仁会北京医院創立十五週年に当りて		詩壇 辻澤菖水評選		33
伯爵 内田康哉	1	民国医界時事		34
支那は果して謎か 坂西利八郎	3	医界時事 夢草生		38
漢医方廃止是非(2) 米田華舫	8	四季の衛生 其の八		40
欧米を回顧して(10) 小川玄々子	13	第3編 夏の衛生(2)		
思ひ出すまゝ(2) 虚心窟主人	21	夏季の衛生の根本義は家庭外飲食の		
民国医界時事		廃止にあり 医学博士 二木謙三		41
新旧医学の衝突(承前)	25	青葉の頃に多い鼻出血の話		
国民政府衛生近況	32	医学博士 坂口武雄		45
支那に於ける衛生運動	32	彙報		49
資料 国際聯盟阿片諮問委員会の活動(承前)		同仁会記事		51
国際聯盟事務局	34	人事		58
四季の衛生 其の七	43	付録		
第3編 夏の衛生(1)		漢薬と食療本草 薬学博士 中尾万三		
小供の消化器病 医学博士 栗山重信	44			
梅雨期の衛生 医学博士 渡辺衡平	50			
会報		第3巻第8号(昭和4年8月号)		
故総裁宮殿下百日祭	55	同仁会事業の発展を喜ぶ		
同仁会北京医院十五週年祝賀会	55	医学博士 金杉英五郎		1
金杉・楠本両博士の渡支	56	人体の寄生虫に就て 医学博士 楠本長三郎		2
同仁会医学雑誌第2巻第6号発行	56	漢詩和読の話から東西医学の将来に		
浙江医専旅行団と同仁会の交歓	56	下瀬謙太郎		16
西湖博覧会に出品申込み	57	支那の保健状態を瞥視して 生江孝之		13
留日中華民国医薬学出身者名簿	57	漢医方廃止の是非(4) 米田華舫		20
第5回留日中華医薬学生懇話会	58	支那の思出(4) 虚心窟主人		23
青島医院記念日	59	欧米を回顧して(11) 小川玄々子		26
昭和4年4月分同仁会各医院患者表	60	見学雜記 斛斗筭		32
人事	59	四季の衛生 其の九		34
彙報	61	第3編 夏の衛生(3)		
歌壇 斎藤茂吉選	62	本邦と外国との夏の気候並に和服と		
詩壇 辻澤菖水選	63	洋服との比較 医学博士 石原房雄		35
済南の撤兵	64	夏の果物 栄養研究所 樋口太郎		39

民国医界時事	O・C・C	50
日本医界時事	夢草生	53
彙報		55
歌壇	斎藤茂吉選	58
詩壇	辻澤菖水選	59
同仁会記事		60

第3巻第9号（昭和4年9月号）

巻頭言 支那会館の建設を提唱す	墨堂	1
節制と健康	医学博士 金杉英五郎	3
日華親善と医道	下瀬謙太郎	11
洋漢両医に望む	医学博士 西端驥一	21
中国医薬教育の現況	史志元	25
四季の衛生 其の十		33

第4編 秋の衛生（1）

秋の生活	高島平三郎	34
秋の胃腸に就て	胃腸病院副院長 川島震一	42

民国医界時事	O・C・C	48
日本医界時事	夢草生	51
歌壇	斎藤茂吉選	53
詩壇	辻澤菖水選	54
彙報		55
同仁会記事		56

第3巻第10号（昭和4年10月号）

賀詞		1
同仁会医学雑誌を読む	下瀬謙太郎	2
或る洋医の経験	木尋生	8
支那の思出（5）	虚心窟主人	11
欧米を回顧して（12）	小川玄々子	14
調査 民国に於て発行する医薬学雑誌調		21
民国医界時事	O・C・C	27
日本医界時事	夢草生	31
四季の衛生 其の十一		33

第4編 秋の衛生（2）

秋の遠足の衛生	大村達夫	34
食用菌と有毒菌	畑中正雄	38

歌壇	斎藤茂吉選	43
詩壇	辻澤菖水選	44
彙報		45
同仁会記事		46

第64回同仁会青島医院集談会	50
----------------	----

第3巻第11号（昭和4年11月号）

巻頭言 本誌の一使命	墨堂	1
中華民国留日学生会館建築意見書	姜琦	2
支那に於ける薬用植物に就て	矢部吉禎	4
同仁会医学雑誌を読む（2）	下瀬謙太郎	9
我国新医内部に階級争闘起らん	錢惠倫	19
中華民国の医政並に医界の近況	陳芳之	23
日本医界に対する民国医界の希望	楊子驥	27
支那の思出（6）	虚心窟主人	29
欧米を回顧して（13）	小川玄々子	32
民国医界時事	O・C・C	44
日本医界時事	夢草生	50
歌壇	斎藤茂吉選	52
詩壇	辻澤菖水選	53
彙報		54
同仁会記事		56
受贈書目		65

第3巻第12号（昭和4年12月号）

巻頭言 青年医家に望む		1
治療志料（1）	富士川游	2
在外医療機関の国際的立場	小川勇	5
衣食住行医	汪于岡	7
支那の思出（7）	虚心窟主人	9
欧米を回顧して（14）	小川玄々子	11
中華民国旅行日記	佐藤嘉津馬	17
	細江静男	24
	今高義	30
民国医界時事	O・C・C	32
日本医界時事	夢草生	36
歌壇	斎藤茂吉選	39
詩壇	辻澤菖水選	40
彙報		41
同仁会記事		43
同仁会北京医院創立満十五年記念祝賀会記事		48

第4巻第1号（昭和5年1月号）

休戦の回顧	伯爵 内田康哉	2
中華民国視察談	坪上貞二	11
同仁会の事業に就て	入澤達吉	22

新年書感	辻澤菖水	27	蒼々集	国分三亥	41
扁鵲の療法と淳于意の療法（1）	中尾万三	29	歌壇	斎藤茂吉選	43
治療志料（2）	富士川游	33	詩壇	辻澤菖水選	44
満蒙、河北及朝鮮の薬草所見其一	石戸谷勉	37	小説 三考廉	榛原茂樹	45
民国医界時事		44	彙報		50
日本医界時事		49	同仁会記事		49
資料 国際保健衛生問題			同仁会青島医院集談會記事（承前）		54
	国際聯盟事務局東京支局	51	支那を觀る（3）	森悦五郎	62

歌壇	斎藤茂吉選	56
詩壇	辻澤菖水選	57
彙報		59
同仁会記事		61
支那を觀る（1）	森悦五郎	70

第4巻第2号（昭和5年2月号）

口絵 呉道子孔子像／上海二景			口絵 宜昌峽二景		
卷頭言 華文医書刊行の必要		1	同仁会巡回診療班と其の乗船當陽丸		
我国医学革命の破壊と建設	余巖	2	卷頭言 お隣り同志		1
治療志料（3）	富士川游	8	治療志料（4）	富士川游	2
扁鵲の療法と淳于意の療法（2）	中尾万三	12	保険と治病	松村壽軒	6
満蒙、河北及朝鮮の薬草所見其二	石戸谷勉	18	我国医学革命の破壊と建設（3）	余巖	14
支那の思出（8）	虚心窟主人	25	満蒙、河北及朝鮮の薬草所見其四	石戸谷勉	19
欧米の回顧（15）	小川玄々子	28	民国医界時論抄訳		31
民国医界時事		34	民国医界時事		36
日本医界時事		37	日本医界時評		39
歌壇	斎藤茂吉選	40	12世紀頃支那医界の珍話	鈴木眞海	42
詩壇	辻澤菖水選	41	欧米の回顧（17）	小川玄々子	46
彙報		42	故久邇宮邦彦王殿下御一年祭に当りて		
同仁会記事		43		山田益彦	52
同仁会青島医院集談會記事		46	詩壇	辻澤菖水選	53
支那を觀る（2）	森悦五郎	55	小説 三孝廉	榛原茂樹	54

第4巻第3号（昭和5年3月号）

口絵 無字碑／青州城と管鮑の墓			口絵 山東の長城と青石関		
卷頭言 支那の医育に就て		1	中華民國医界名士同仁会招宴		
我国医学革命の破壊と建設（2）	余巖	3	卷頭言 民国人の日本研究熱に就て		1
北平の近状	飯島庸徳	10	支那の法医学に就て	柏田忠一	2
扁鵲の療法と淳于意の療法（3）	中尾万三	16	満蒙、河北及朝鮮の薬草所見其四	石戸谷勉	6
満蒙、河北及朝鮮の薬草所見其三	石戸谷勉	22	中華民國医界より日本に対する希望		
欧米の回顧（16）	小川玄々子	27	全紹清 瞿紹衡 揚子驤 徐誦明		13
民国医界時事		33	潮州の韓文公祠廟の碑に就て	入澤達吉	18
日本医界時事		38	欧米の回顧（18）	小川玄々子	19
			李白伝	榛原茂樹	30

第4巻第4号（昭和5年4月号）

第4巻第5号（昭和5年5月号）		
-----------------	--	--

第4巻第5号（昭和5年5月号）

口絵 山東の長城と青石関		
中華民國医界名士同仁会招宴		
卷頭言 民国人の日本研究熱に就て		1
支那の法医学に就て	柏田忠一	2
満蒙、河北及朝鮮の薬草所見其四	石戸谷勉	6
中華民國医界より日本に対する希望		
全紹清 瞿紹衡 揚子驤 徐誦明		13
潮州の韓文公祠廟の碑に就て	入澤達吉	18
欧米の回顧（18）	小川玄々子	19
李白伝	榛原茂樹	30

民国医界時事	38
日本医界時事	42
漢口医院巡回診療班日誌	44
第8回日本医学会余録	49
彙報	52
同仁会記事	54

第4巻第6号(昭和5年6月号)

口絵 九華山天台峰の巨巖と王陽明祠道(68頁説明)／同仁会第2回中国医師講習会開講式	
卷頭言 同仁会調査部の設置	1
漢人の発展性 長野朗	3
満蒙、河北及朝鮮の薬草所見其五 石戸谷勉	7
阿片吸食体験記(上) 井上紅梅	14
支那社会相二題 倭軒	24
漢口医院巡回診療班日誌(承前)	27
小説 両姑娘 陶晶孫	31
民国医界時事	42
日本医界時事	44
彙報	46
同仁会中国医師講習会記事	47
同仁会記事	56
支那を觀る(5) 森悦五郎	59

第4巻第7号(昭和5年7月号)

口絵 黄山二景／同仁会新事務所	
卷頭言 中華民國日本医薬学出身者名簿に就て	1
日本に於ける医学の変遷と洋医学の濫觴(上) 富士川游	2
満蒙、河北及朝鮮の薬草所見其七 石戸谷勉	9
中国医師講習会より歸りて 秦佐八郎 宮川米次	15
阿片吸食体験記(中) 井上紅梅	25
漢口医院巡回診療班日誌(承前)	35
欧米を回顧して(19) 小川玄々子	39
小説 後方医院 張繼純	48
民国医界時事	62
日本医界時事	64
彙報	66
同仁会記事	67

第4巻第8号(昭和5年8月号)

口絵 蕪湖二景／吉田外務次官一行の同仁会視察	
卷頭言 同仁会医院の使命	1
六神丸とガマの油の科学的考察 小竹無二雄	2
日本に於ける医学の変遷と洋医学の濫觴(下) 富士川游	6
満蒙、河北及朝鮮の薬草所見其八 石戸谷勉	12
阿片吸食体験記(下) 井上紅梅	17
第68回同仁会青島医院集談会(上)	20
欧米を回顧して(20) 小川玄々子	32
小説 薄情郎を打つ 榛原茂樹	46
民国医界時事	53
日本医界時事	54
彙報	56
同仁会記事	57
北支に旅して 小野得一郎	60

第4巻第9号(昭和5年9月号)

口絵 泰安と長沙／南方支那の美人	
卷頭言 支那の医育機関に就て	1
『中華民國医事衛生の現状』を読む(華北医報社評)	2
西医東漸前の創傷治療薬に就て 飯島茂	8
満蒙、河北及朝鮮の薬草所見其八 石戸谷勉	14
第68回同仁会青島医院集談會(下)	20
欧米を回顧して(21) 小川玄々子	31
支那の女性 池田桃川	34
音楽会小曲 陶晶孫	41
民国医界時事	50
日本医界時事	52
彙報	54
同仁会記事	55
支那を觀る(6) 森悦五郎	58

第4巻第10号(昭和5年10月号)

口絵 范文公の像と其の廟 中華民仏教徒寄贈の吊靈鐘	
卷頭言 秋に寄す	1
支那の医学界と文化事業	2
支那民族は何故に亡びぬ乎 上田恭輔	5
上海の医学校、病院參觀記事 下瀬謙太郎	11
支那日誌	11

長髪賊尊崇令	18	支那婚礼の話	井上紅梅	33	
満蒙、河北及朝鮮の薬草所見其十	石戸谷勉	23	小説 岐路	郭沫若	40
延年長寿補益養性秘聞	田中吉左衛門	28	民国医界時事		51
小説 阿片極楽、阿片地獄（上）	井瀬蓼介	34	日本医界時事		54
民国医界時事		47	彙報		57
日本医界時事		50	同仁会記事		57
彙報		54	支那を觀る（8）	森悦五郎	59
同仁会記事		56			
支那を觀る（7）	森悦五郎	59	第5卷第1号（昭和6年1月号）		

第4巻第11号（昭和5年11月号）

口絵	同仁会青島医学校第3回卒業式	
	平和郷四川	
卷頭言	中日医薬学生談話会の設立	1
墨子と現代思想	荻野長知	2
上海に於ける医学校、病院參觀記其二		
	下瀬謙太郎	7
滿蒙、河北及朝鮮の藥草所見其十一		
	石戸谷勉	14
中華民國健康保險計畫書	国民政府衛生部	19
支那日記		19
珍聞医談		25
銷夏記游	入澤達吉	28
支那の性經	池田桃川	34
支那医薬学実地研究生の報告		38
小説 阿片極樂、阿片地獄(下)	井瀬蓼介	43
民国医界時事		53
日本医界時事		55
彙報		58
中日医薬学生談話会		59
同仁会記事		61

第4巻第12号（昭和5年12月号）

口絵 韓文公の像と其祠／北支那の冬		
卷頭言 『同仁』市場進出の意義		1
団匪償金と文化事業	貴志英夫	2
満蒙、河北及朝鮮の薬草所見其十二		
	石戸谷勉	12
上海に於ける医学校、病院参観記其三		
	下瀬謙太郎	18
支那日記		18
同仁会漢口医院に於ける実習記	神蔵助盛	25

第5巻第1号（昭和6年1月号）

口絵 狩野芳崖筆蘇武図		
卷頭詞 社頭雪	斎藤茂吉	1
説苑		
更新の意気と同仁の精神	坪上貞二	2
安と均	長野朗	3
漢方捨つべからず	田中吉左衛門	8
上海視察旅中意外の数々	下瀬謙太郎	15
隨筆		
耆婆の話	鈴木真海	20
表紙説明		28
支那秘薬物語（1）	中野江漢	29
支那正月の食べ物	井上紅梅	40
支那日記		40
血		44
支那の酒飲の話	池田桃川	48
数より見た人体		48
編輯後記		51
文芸		
施料争議	正木不如丘	54
金剛山にて	郭沫若	59
燕京雜吟	西村木尋	65
歌壇	斎藤茂吉	67
詩壇	辻澤菖水	68
報道		
中国医界時事		69
日本医界時事		71
彙報		75
同仁会記事		77
資料		
満蒙、河北及朝鮮の薬草所見其十三		
	石戸谷勉	79
上海に在る各国の病院調（1）		
	同仁会調査部	85

付録

昭和6年同慶帖

第5巻第2号(昭和6年2月号)

口絵 羅浮仙図(27頁参照)

巻頭詞 1

説苑

1928, 9 両年に於ける国民政府衛生部の業跡

刁敏謙 2

支那の真相と支那研究の科学化 田中忠夫 9

随筆

上海視察旅行談, 上海在住の邦人医師

下瀬謙太郎 17

文身と支那及南蛮北夷 中山栄造 28

清室内房秘話 池田桃川 32

花柳病の漢法療法 南拜山 38

支那日記 38

文芸

誰が妻 一庭 45

資料

満蒙, 河北及朝鮮の薬草所見其十四

石戸谷勉 48

上海に在る各国の病院調(2)

同仁会調査部 53

報道

中国医界時事 68

日本医界時事 71

彙報 73

中日医薬学生談話会記事 74

同仁会記事 75

支那を観る(9) 森悦五郎 77

第5巻第3号(昭和6年3月号)

口絵 水ぬるむ(柴田是真筆)

巻頭詞

新興支那の文化 1

説苑

経籍訪古志を読んで感あり 水野梅曉 2

随筆

上海視察談, 民国の医育問題 下瀬謙太郎 9

支那医界漫談(1) 陶熾 16

支那日記 16

文芸

函谷関 一天生 25

詩 辻澤菖水選 40

歌 斎藤茂吉選 41

報道

中国医界時事 42

日本医界時事 45

彙報 47

同仁会記事 49

中日医薬学生談話会記事 54

資料

上海に在る各国の病院調(完)

同仁会調査部 57

満蒙, 河北及朝鮮の薬草所見其十四

石戸谷勉 66

第5巻第4号(昭和6年4月号)

口絵 採桑図(16頁口絵説明参照)

巻頭詞

純真なる学者の態度 1

説苑

中华民国医学教育振興策(1) 戈紹龍 3

随感, 漫筆

伍連德博士と語る 布施知足 17

中国医学雑誌展望 17

唐の夢 田中吉左衛門 20

医師の人格 稲田龍吉 27

支那日記 30

中日医界の歴史的考察 藤浪剛一 31

学術救国 劉燾昌 34

文芸

詩 辻澤菖水選 40

歌 斎藤茂吉選 41

帰への函谷関 郭沫若 42

資料

新興支那の医事衛生思想と其の施設(1)

濱田峰太郎 50

満蒙, 河北及朝鮮の薬草所見其十四

石戸谷勉 66

報道

中国医界時事 70

日本医界時事 73

中日医薬学生談話会記事	75	文芸	
同仁会記事	76	小説 孫中山の死	田漢 27
支那を觀る (10)	森悦五郎 78	詩	辻澤菖水選 44
		歌	斎藤茂吉選 45
		詩仙李白詩聖杜甫	呉錫文 46
第5卷第5号 (昭和6年5月号)		報道	
口絵 三笑人		中国医界時事	51
卷頭言		中日医薬学生談話会記事	53
理想と実行	1	中国社会時相	54
說苑		日本医界時事	59
外人から見た中国の文化	風間阜 2	同仁会記事	63
中華民國医学教育振興策 (2)	戈紹龍 11	支那日記	70
中国医界漫談 (2)	陶熾 24		
米国教授の日本觀	24	第5卷第7号 (昭和6年7月号)	
支那日記	30	口絵 寺崎廣業氏筆午睡	
支那漫談 心中と苦命	中山栄造 32	卷頭言	
文芸		同仁会々長と満鉄總裁	1
詩	辻澤菖水選 37	說苑	
歌	斎藤茂吉選 38	支那の繁栄と列国の協力	長野朗 2
血と涙	郁達夫 39	三つの報告書を中心として	柏田忠一 5
報道		均産主義と日華の協和	野満四郎 12
中国医界時事	53	隨筆	
中国社会時相	71	中国人に対する態度	小川勇 14
日本医界時事	61	宣伝戰	無平学人 14
同仁会記事	75	思ひ出の一節	萱野長知 19
中日医薬学生談話会記事	76	濟南で発見した新魚類七種	柴田清 22
資料		支那秘薬物語 (2)	中野江漢 23
新興中華民國の医事衛生思想 (2)		上海研究所にはどんな病院を付設すべきか	
	濱田峰太郎 78	矢来里人 31	
滿蒙、河北及朝鮮の藥草所見 完		文芸	
	石戸谷勉 85	飄流挿曲 (小説)	郭沫若 36
第5卷第6号 (昭和6年6月号)		詩	辻澤菖水選 48
口絵 松岡環翠筆蓮華図		歌	斎藤茂吉選 49
卷頭言		報道	
支那留学生の為に医育機関の特設を要す	1	中国社会時相	50
說苑		中国医界時事	55
最近の支那に就いて	谷正之 3	日本医界時事	60
支那自然科学の創見	山本鼎 8	中日医薬学生談話会記事	64
漫筆隨感		同仁会記事	65
六不治五難參毒	田中吉左衛門 12	支那日記	69
中国辺疆風俗綺話	川邊白楊 18		
湯爾和先生と語る	記者 25		

第5巻第8号（昭和6年8月号）

口絵 満鉄新正副総裁就任祝賀会

巻頭言

外交の新傾向 1

説苑

列国の対支文化事業の将来 柏田忠一 2

日本近代医学の回顧 平光吾 6

支那現代婦人の問題 西山栄久 15

随筆

支那飲料の話 米田祐太郎 24

モダン北平より 風間阜 29

文芸

歌壇 斎藤茂吉選 34

詩壇 辻澤菖水選 35

中山服（小説） 羅暄嵐 36

報道

中国社会時相 47

中国医界時事 51

佐藤博士の南華行 51

日本医界時事 56

支那日記 53

同仁会記事 61

中日医薬学生談話会記事 64

付録

支那常識（其一） 賀来敏夫 65

第5巻第9号（昭和6年9月号）

口絵 平福穂庵筆松陰煮茶之図

巻頭言

中華民国の大水災を救へ 1

説苑

大水後の防疫問題（大公報社説） 2

座談

隣邦民族に日新医学の普及を図る方法

入澤達吉 下瀬謙太郎 宮川米次

水野梅曉 上田恭輔 小野得一郎 4

漫筆

支那料理について 辻聴花 20

エロ的に活躍する共産娘子軍 20

支那への族 野満四郎 28

支那日記 28

客星帝座を犯す 野尻抱影 32

文芸

詩壇

歌壇

報道

中国社会時相 41

支那各地水害彙報 43

中国医界時事 48

中日医薬学生談話会記事 50

日本医界時事 51

同仁会記事 55

資料

麻酔剤製産制限に関する国際的活動の回顧

国際聯盟通報局 59

編後に

付録

支那常識（其二） 賀来敏夫 76

第5巻第10号（昭和6年10月号）

口絵 （1）同仁会第4診療班，（2）第4診療

班出発と同仁会救災薬品の発送，（3）

第2診療班の巡航と診療の状況，（4）第

1診療班の巡航と診療所前の群衆，（5）

第3診療班とその出発，（6）黒山に蜷集

せる避難民と同仁会診療船

巻頭言 再び中華民国の水災に就て 1

説苑 団匪償金の種々相（1） 貴志英夫 2

座談

中日医学界の連絡を助長する必要なきか，留日

中華民国学生の為に医学校特設の必要なきか

入澤達吉，下瀬謙太郎，宮川米次，

水野梅曉，上田恭輔，小野得一郎 11

随筆

中国医界漫談（3） 陶熾 21

支那への旅（第2信） 野満四郎 26

文芸

歌壇 斎藤茂吉選 28

詩壇 辻澤菖水選 29

報道

中華民国水災後報 30

同仁会賑災事業 31

漢口水災情報 34

中国医界時事 41

中日医薬学生談話会記事	42	説苑	
中国社会時相	43	対華外交感言	宮脇賢之介 2
日本医界時事	47	団匪償金の種々相(3)	貴志英夫 8
同仁会記事	51	支那に於けるキリスト教宣教師の医学的活動 (承前)	下瀬謙太郎 15
付録		随筆	
支那常識(其三)	賀来敏夫 57	日貨排斥の励行期に際して	高洲草夢 31
支那日誌	68	支那女学生の見たる日本	31
第5巻第11号(昭和6年11月号)		支那飲料の話(2)	米田祐太郎 33
口絵 与謝燕村筆谿山探薬図		満州事変に対する外国新聞の論調	35
巻頭言 吾が水災救護に対する中国側の態度	1	武漢地方を視察して	篠崎正幸 37
説苑		文芸	
支那に於けるキリスト教宣教師の医学的活動		詩壇	辻澤菖水選 43
	下瀬謙太郎 3	歌壇	斎藤茂吉選 44
団匪償金の種々相(2)	貴志英夫 15	小説 刺花流氓	井上紅梅訳 45
随筆		報道	
支那への旅(第3信)	野満四郎 21	中国社会時相	50
支那秘薬物語海狗の巻	中野江漢 26	中国医界時事	53
齐鲁大学国際親善考察団帰校報告会傍聴記		日本医界時事	55
	高洲草夢 26	中日医薬学生談話会記事	58
伊藤公と寒山寺梵鐘	池田桃川 42	同仁会記事	59
支那日誌	42	付録	
文芸		支那常識(其四)	賀来敏夫 61
詩壇	辻澤菖水選 46	第6巻第1号(昭和7年1月号)	
歌壇	斎藤茂吉選 47	口絵 明治大帝御尊影(平福百穂画伯謹写)	
報道		巻頭言 中華国民に告ぐ	1
同仁会の中国水難救済事業の経過		説苑	
	小野理事報告 48	年頭所感	坪上貞二 2
診療班日記	第3診療班 50	時局に際して対支文化事業を思ふ	
診療雑記	第4診療班 53		下瀬謙太郎 4
中国社会時相	55	文化事業今後の進路	長野朗 12
中日医薬学生談話会記事	57	団匪償金種々相(4)	貴志英夫 15
中国医界時事	58	支那に於ける「寿」の研究	今牧白鈴 22
日本医界時事	60	随筆	
同仁会記事	64	淄博の史跡を探る	馬場春吉 40
資料		天津事変の前後	野満四郎 49
中国の大学専門学校の近況	編集部 66	学之為言効也	矢野春隆 51
編後に	74	支那の兵隊の話	池田桃川 53
第5巻第12号(昭和6年12月号)		尼僧の生活を覗く	坂田寛三 56
口絵 中村不折氏筆神農図		文芸	
巻頭言 年末所感	1	歌壇	斎藤茂吉選 59

詩壇	辻澤菖水選	60	第6巻第3号(昭和7年3月号)		
皇国一千年前の新年詩	辻澤菖水	61	口絵 支那農村二景		
(小説)梅蘭芳伝(1)	榛原茂樹	67	卷頭画 蘇州	清水東翠	1
報道			説苑		
中国医界時事		80	対外文化政策に就て	三枝茂智	2
中国社会時相		81	随筆		
日本医界時事		82	端溪の硯坑に就て	飯島茂	15
同仁会記事 漢口医院長武正博士談		85	年頭観	福地信世	24
付録			満州並に上海事変に関する外国新聞の論調		24
支那常識(其五)	賀来敏夫	89	支那医聖列伝(其二)	今牧白鈴	32
昭和7年同慶帖			上海と陶庵公	池田桃川	39
編後に		103	淄博の史跡を探る(完)	馬場春吉	47
			酒	米田華舫	52
第6巻第2号(昭和7年2月号)			文芸		
口絵 蘭亭と流觴亭			詩壇	辻澤菖水選	60
卷頭画 普陀山		1	歌壇	斎藤茂吉選	61
説苑			蘇州の名医と倪雲林	松村雄蔵	62
日本医学の支那に於ける組織化	武正一	2	報道		
今日之孟子救国策	李文権	6	中国社会時相		70
随筆			中国医界時事		72
支那医聖列伝(其一)	今牧白鈴	15	日本医界時事		73
淄博の史跡を探る(2)	馬場春吉	26	同仁会記事		77
蘭亭	西川寧	33	中日医薬学生談話会記事		77
淄川の半日	高洲太助	37	漢口通信		78
満州を後に	野満四郎	40	付録		
支那見学の一節	寺崎由太郎	42	支那常識(其七)	賀来敏夫	80
文芸			支那読み(2)		97
歌壇	斎藤茂吉選	48	第6巻第4号(昭和7年4月号)		
詩壇	辻澤菖水選	49	口絵 舟山列島二景		
(小説)梅蘭芳伝(2)	榛原茂樹	50	卷頭言 時局と同仁会事業		1
報道			説苑		
中国社会時相		66	満州医業の現状と将来	菊田新太郎	3
中国医界時事		67	上海に於ける各国人	清水董三	7
日本医界時事		69	随筆		
同仁会記事		71	蘭(1)	寺中猪介	14
中日医薬学生談話会記事		71	端溪の硯坑に就て(2)	飯島茂	17
付録			蘇州	松村雄蔵	28
支那常識(其六)	賀来敏夫	72	支那医聖列伝(其三)	今牧白鈴	32
支那読み(1)		84	文芸		
支那趣味漫談		88	詩壇	辻澤菖水選	41
			日華両優の屏障	雲莊生	42

歌壇	斎藤茂吉選	44	支那読み(4)	121
報道			編後に	122
中国社会時相		45		
中国医界時事		46	第6巻第6号(昭和7年6月号)	
中日医薬学生談話会記事		47	口絵 蒙古包と内蒙古の草原	
日本医界時事		48	巻頭言 犬養首相を悼む	1
同仁会記事		51	説苑 失業問題と精神衛生	斎藤玉男 2
付録			随筆	
支那常識(其八)	賀来敏夫	53	支那香艶余録	村田烏江 7
支那読み(3)		72	蘭の話(3)	寺中猪介 16
上海事変に関する外国新聞の論調		73	支那医聖列伝(其五)	今牧白鈴 21
編後に		75	洛陽の国難会議	21
			一党専制打破の叫び	27
第6巻第5号(昭和7年5月号)			叔梁紇の墓を弔ふ	馬場春吉 35
口絵 虎邱山と采香径			上海バラバラ事件	井上紅梅 37
巻頭言 5周年を迎えて		1	察哈爾蒙旗組織	古川園重利 49
説苑			文芸	
仁術に国境なし	下村海南	2	歌壇	斎藤茂吉選 59
日支親善と同仁会	内藤久寛	6	詩壇	辻澤菖水選 60
同仁会事業30年の回顧	下瀬謙太郎	9	(小説) 莊子	郭沫若 61
四海同仁	長野朗	17	報道	
随筆			中国社会時相	70
午睡と人生と保健	田中吉左衛門	19	中国医界時事	70
端溪の硯坑に就て(3)	飯島茂	25	中日医薬学生談話会記事	72
蘭(2)	寺中猪介	37	日本医界時事	74
悲劇と喜劇	秋澤次郎	45	同仁会記事	77
少昊陵を訪ふ	馬場春吉	47	付録	
支那医聖列伝(其四)	今牧白鈴	56	支那常識(其十)	賀来敏夫 79
文芸			支那読み(5)	89
支那新文学運動の現状	大高岩夫	67	編後に	90
詩壇	辻澤菖水選	75		
歌壇	斎藤茂吉選	76	第6巻第7号(昭和7年7月号)	
董其昌邸焼打事件	村松雄蔵	77	口絵 杭州二景	
孫文死線彷徨記	池田桃川	85	巻頭画 河岸にて	東翠 1
報道			説苑	
中国社会時相		100	上海と病院	岸金城 2
中国医界時事		100	中国新医史稿(1)	無平学人 9
中日医薬学生談話会記事		101	随筆	
日本医界時事		102	端溪の硯坑に就いて(4)	飯島茂 18
同仁会記事		105	支那香艶余録(2)	村田烏江 27
付録			宋代の陶窯	奥野信太郎 35
支那常識(其九)	賀来敏夫	111	日本を責め得るか	ギボンズ 35

支那医聖列伝（其六）	今牧白鈴	41	日本医界時事	66
内戦廃止運動		50	中日医薬学生談話会記事	69
犬養木堂先生の風格	野満四郎	54	同仁会記事	71
足袋と纏足	生島横渠	55	編後に	73
文芸				
詩壇	辻澤菖水選	59	第6巻第9号（昭和7年9月号）	
歌壇	斎藤茂吉選	60	口絵 廬山二景	
長髪賊（小説）（1）	梅外山人訳	61	巻頭画 協力	東翠 1
報道			説苑	
中国社会時相	70		排日思想の根源	児玉廣人 2
中国医界時事	70		中国の接生婆と助産士	濱田峰太郎 7
日本医界時事	74		汪兆銘論	風間阜 13
中日医薬学生談話会記事	72		随筆	
同仁会記事	77		支那硯石文献解題（2）	飯島茂 20
付録			上海捨子収容所	桃谷文治 32
支那常識（其十一）	賀来敏夫	85	隔靴論	生島横渠 35
支那読み（6）		94	姑蘇の名橋	松村雄蔵 38
編後に		95	赤壁の秋	池田桃川 44
			化粧考	村田烏江 47
第6巻第8号（昭和7年8月号）			至聖孔子の墓（2）	馬場春吉 53
口絵 蘇州の塔三景			支那医聖列伝（其七）	今牧白鈴 57
巻頭言 中華民国の新傾向		1	文芸	
説苑			古稀書懷	国分三亥 62
満州雑感	岸田英治	2	歌壇	斎藤茂吉選 63
民国婦人の近況	田中忠夫	7	詩壇	辻澤菖水選 64
随筆			小説 長髪賊（3）	梅外山人訳 65
支那硯石文献解題（1）	飯島茂	11	報道	
西遊通信（其一）	岩村成允	18	中国社会時相	76
劇に現はれたる女性	村田烏江	20	中国医界時事	76
蘇州古塔物語り	松村雄蔵	28	日本医界時事	78
烟	生島横渠	32	中日医薬学生談話会記事	81
天童寺の一夜	池田桃川	34	同仁会記事	82
支那小説 空閑少佐を読む	澤村幸夫	35	編後に	84
支那医聖列伝（其六）	今牧白鈴	38		
至聖孔子の墓（1）	馬場春吉	46	第6巻第10号（昭和7年10月号）	
筈皮博士済南院長就任祝賀句集を読みて	墨堂	51	口絵 働きぬく支那の女	
文芸			巻頭言 満州国承認を機として	1
歌壇	斎藤茂吉選	52	説苑	
詩壇	辻澤菖水選	53	国外で働く者の覚悟	江口定條 3
小説 長髪賊（2）	梅外山人訳	54	中華民国と満州国	岸田英治 6
報道			彼を知り己を知る	太田秀穂 14
			随筆	

76

同仁会記事	76	誨淫書	生島横渠	12
付録		支那美人鑑定	井上紅梅	15
続支那常識 (1)	岡野一郎	楊守敬先生を懷ふ	澤村幸夫	17
	77	北平故宮博物館移転問題	古城生	20
第6巻第12号 (昭和7年12月号)		漢方医について	猪頭一郎	23
口絵 冬は来りぬ		歳朝覧古	辻澤菖水	24
巻頭言 昭和7年を送る	1	痛にかゝらぬ話	長与又郎	28
随筆		支那風物記 (1)	米内山庸夫	35
新京雜記	岸田英治	宋金郎	村田烏江	42
支那学	無平学人	聚珍探訪		50
祝由科	生島横渠	蒋介石を捨てた妓	池田桃川	54
中国近代の書繡家	澤村幸夫	上海の高杉晋作	森山直樹	61
支那硯石文献解題 (5)	飯島茂	上海雜話	東翠生	68
蘇州の画舫	松村天頼	スケッチ帳から	玉井莊雲	72
リットン報告に対する吾意見書と外紙の論調		歌壇	斎藤茂吉	78
	25	詩壇	辻澤菖水	79
座談		長髮賊 (7)	梅外山人	80
中国懷旧医談 鈴木又, 徐昌道, 神谷甫彦		通信		
斎藤為助, 原素行, 生島捨次郎	30	中国医界時事		93
文芸		日本医界時事		96
詩壇	辻澤菖水選	同仁会記事		99
歌壇	斎藤茂吉選	中日医薬学生談話会記事		99
長髮賊 (小説) (6)	梅外山人訳	漢口医院通信		100
資料		編輯後記		106
保健問題と国際連盟	徳田六郎			
	55			
報道		第7巻第2号 (昭和8年2月号)		
中国社会時相	63	巻頭画 寒山暮色		
中国医界時事	65	随筆		
日本医界時事	66	日本人を紹介せる支那人	澤村幸夫	2
同仁会記事	68	試験地獄	生島横渠	5
中日医薬学生談話会記事	68	我東方文化事業展開の契機	岸田英治	8
		顔淵の墓を弔ふ	馬場春吉	11
第7巻第1号 (昭和8年1月号)		流氓	大高岩夫	15
口絵 天宮賜福之図	福地信世	上海・支那医家諸相 (1)	小山清次	18
巻頭画 朝の海	1	社会問題に現はれた支那の国民性	長野朗	25
随筆		支那風物記 (2)	米内山庸夫	33
支那芝居の元旦	福地信世	聚珍探訪		44
揮毫を乞はれての感	上田恭輔	詩経時代に於ける支那の女性	李建芳	48
故久邇宮邦彦王殿下の御遺墨に就て		支那文人側面談 (1)	古城隠士	57
	小野得一郎	スケッチ帳から	玉井莊雲	64
姑蘇の四季	松村雄蔵	歌壇	斎藤茂吉	70
屠蘇の話	中野江漢	詩壇	辻澤菖水	71

長髪賊 (8)	梅外山人	72	厓山と厓門	龍孫生	2
都市紹介・首都南京	小坂士	83	中国に於ける文化事業	瀬川浅之進	3
報道			上海事変の思出	清水董三	4
中国社会時相		90	鄭国務総理	佐藤四郎	6
中国医界時事		91	満州国人の教育に就て	柏田忠一	8
日本医界時事		93	蒙古民族の由来	古川園重利	12
同仁会記事		95	支那風物記 (4)	米内山庸夫	17
中日医薬学生談話会記事		96	聚珍探訪		32
編後に		96	東西還壮術今昔譚 (1)	田中吉左右衛門	36
			中国文人側面綺談 (2)	古城隠士	40
			欧米視察団	岩村成允	49
第7巻第3号 (昭和8年3月号)			滬上雑俎	無平学人	63
巻頭画 漁り		1	詩壇	辻澤菖水	66
随筆			歌壇	斎藤茂吉	67
骨董屋のコツ	楠瀬日年	2	小説 長髪賊 (10)	梅外山人	68
王紫詮の生涯と事業	桃谷文治	3	報道		
満州雑曲	貴志英夫	8	中国社会時相		82
三日天下	生島横渠	10	日本医界時事		83
K L 問答	無平学人	14	中日医薬学生談話会記事		85
中国農村赤化事情一斑	野満四郎	17	同仁会記事 付仁風会		86
中国の変つた狩猟の話	内田佐和吉	19	編後に		88
東洋モンロー主義	下村宏	23			
上海・支那医家諸相 (2)	小山清次	27	第7巻第5号 (昭和8年5月号)		
支那風物記 (3)	米内山庸夫	31	巻頭画 江浜の若葉		1
聚珍探訪		44	随筆		
詩経時代に於ける支那の女性生活 (2)			支那新派劇の陸甫	澤村幸夫	2
	李建芳	48	桜咲く大日本ぞ日本ぞ	貴志英夫	5
スケッチ帳から	玉井莊雲	57	北里青山先生	佐藤四郎	7
詩壇	辻澤菖水	63	支那の回光は満州国発展の如何に懸る		
歌壇	斎藤茂吉	64		野満四郎	8
長髪賊 (9)	梅外山人	65	支那医書に載せたる詩歌	前田護園	10
都市紹介・最近の北平	風間阜	79	日本の女と支那の女	古鷹高三郎	12
報道			晏城に遊ぶ	馬場春吉	18
日本医界時事		82	窮袴, 守宮, 貞操帯	周作人	24
中国社会時相		85	東西還壮術今昔譚 (2)	田中吉左右衛門	30
中国医界時事		85	支那文人側面綺談 (3)	古城隠士	34
中日医薬学生談話会記事		86	聚珍探訪		40
同仁会記事		87	墨に就いて (1)	飯島茂	42
編後に		90	支那風物記 (5) 大陸の人々	米内山庸夫	45
第7巻第4号 (昭和8年4月号)			国境満州里の春	古川園利重	59
巻頭画 嵐峽煙雲		1	詩壇	辻澤菖水選	62
随筆			歌壇	斎藤茂吉選	63

長髪賊 (小説) (11)	梅外山人	64	聖跡巡幸 (承前)	生島横渠	6
漢口雑話	内田佐和吉	77	王道経済論	野満四郎	11
報道			聚珍探訪		15
中国社会時相		83	中国両性不平均問題	呉澤霖	19
中国医界時事		84	満州国の文化的施設に就て	水野梅暁	27
中日医薬学生談話会記事		84	北平の看護界	X Y Z	34
日本医界時事		85	満蒙画帖より	玉井莊雲	37
同仁会記事		88	支那風物記 (7) 近代支那画 (上)	米内山庸夫	43
編後に		89	墨に就いて (3)	飯島茂	55
			詩壇	辻澤菖水選	64
			歌壇	斎藤茂吉選	65
第7巻第6号 (昭和8年6月号)			小説 長髪賊 (12)	梅外山人	66
巻頭画 水辺の初夏		1	報道		
随筆			中国社会時相		78
聖跡巡幸	生島横渠	2	中国医界時事		79
荔枝・枇杷その他	桃谷文治	6	中日医薬学生談話会記事		80
北平故宮古物と石鼓の南遷	風間早	8	日本医界時事		81
儒門事親を読む	前田設園	10	漢口通信		83
大上海の医薬界を語る	龐京周	11	同仁会記事		84
朱・毛の乱	榛原茂樹	21	編後に		85
墨に就いて (2)	飯島茂	25			
支那風物記 (6) 杭州名画記	米内山庸夫	35			
聚珍探訪		48	第7巻第8号 (昭和8年8月号)		
東西還壯術今昔譚 (3)	田中吉左右衛門	50	巻頭画 川風	清水東翠	1
甘珠爾廟に関連して	古川園重利	54	江浙の水と女	桃谷文治	2
熱河グラフィック		58	支那の結婚と葬式	古城生	4
滬上雑俎 (2)	無平学人	62	唐人送贈詩抄	前田設園	6
詩壇	辻澤菖水選	65	目醒めてもよからう	名取保	7
歌壇	斎藤茂吉選	66	聚珍探訪		10
長髪賊 (12)	梅外山人	67	古文学から見た支那の一国民性	芝野六助	12
報道			許行主義と権藤主義	横田三郎	18
中国社会時相		77	硯の使用法及保存法	飯島茂	23
中国医界時事		77	支那風物記 (8) 近代支那画 (下)		
中日医薬学生談話会記事		78		米内山庸夫	30
日本医界時事		79	満蒙画帖より	玉井莊雲	40
済南通信		81	東西還壯術今昔譚 (4)	田中吉左右衛門	46
同仁会記事		82	虎邱	松村雄蔵	50
編後に		84	詩壇	辻澤菖水選	55
			歌壇	斎藤茂吉選	56
第7巻第7号 (昭和8年7月号)			小説 長髪賊 (14)	梅外山人	57
巻頭画 川風	清水東翠	1	報道		
清朝末の海外留学生	澤村幸夫	2	中国社会時相		70
いやな好事家	楠瀬日年	4	中国医界時事		70

中日医薬学生談話会記事	72	満蒙画帖より	玉井莊雲	21
日本医界時事	73	支那風物記 (10) 西湖景物志 (1)		
同仁会記事	75		米内山庸夫	33
編後に	77	戯曲 王昭君	郭沫若	39
		小説 長髪賊 (16)	梅外山人	54
		詩壇	辻澤菖水選	69
		歌壇	斎藤茂吉選	70
		今日の武昌	内田佐和吉	71
		報道		
		中国社会時相		77
		中国医界時事		77
		日本医界時事		78
		同仁会記事		81
		中日医薬学生談話会記事		81
		編後に		82
第7巻第9号 (昭和8年9月号)				
巻頭画 水光る	清水東翠	1		
滬上雑俎	無平学人	2		
聖賢偉人配偶者漫談	永富均	4		
福祿寿の願望	澤村幸夫	6		
新京の一夜	岸田英	9		
満蒙画帖より	玉井莊雲	12		
満州の家庭と婦人	武地吉次郎	18		
支那風物記 (9) 巴蜀山水記	米内山庸夫	21		
王昭君の型	丹澤豊子	28		
支那美人考	松村雄蔵	32		
聚珍探訪		38		
見えぬ世界の力	多賀萬城	40		
鄭州怪談	烏江生	45		
画聖王摩詰	池田桃川	48		
支那の『首斬浅右衛門』の事	榛原茂樹	56		
詩壇	辻澤菖水選	59		
歌壇	斎藤茂吉選	60		
小説 長髪賊 (15)	梅外山人	61		
武昌	内田佐和吉	71		
報道				
中国社会時相		76		
日本医界時事		77		
医院通信		80		
同仁会記事		82		
中日医薬学生談話会記事		82		
編後に		83		
第7巻第11号 (昭和8年11月号)				
巻頭画		1		
嵯峨野の秋	秋澤次郎	2		
印人風懷	楠瀬日年	4		
日華の栄える道	長野朗	5		
子達に聴く	岸田英	7		
娶らば日本の女を	桃谷文治	10		
詩のはじめ	辻澤菖水	12		
中国問題と唯物錯覚の打開	野満四郎	14		
支那文学に就て	本田成之	18		
満州に於ける在家裡教	柏田忠一	23		
支那のゲ・ベ・ウ	榛原茂樹	27		
支那の混乱と支那研究の混乱	田中忠夫	29		
孔雀	渡邊晨畝	35		
林春雄博士のシルエット	記者	40		
戯曲 王昭君 (承前)	郭沫若	43		
小説 長髪賊 (17)	梅外山人	53		
詩壇	辻澤菖水選	67		
歌壇	斎藤茂吉選	68		
漢口を語る	武正一	69		
巷に拾ふ	古城学人	74		
報道				
中国社会時相		79		
中国医界時事		81		
中日医薬学生談話会記事		81		
日本医界時事		82		
第7巻第10号 (昭和8年10月号)				
巻頭画 秋たけなは	其石	1		
結婚天命説	村田孜郎	2		
子福者	澤村幸夫	6		
黛玉葬花	大高巖	8		
松南詩抄	前田設園	12		
支那文章の一特質	芝野六助	13		
現代支那の夫婦年齢差について	田中忠夫	20		
支那の中間搾取	風間阜	25		

同仁会記事	85	春遊	葉紹鈞	62
編後に	86	葉紹鈞と其の作品	池田孝	64
		同人句抄		67
		同人吟詠		68
第7巻第12号(昭和8年12月号)		甘珠児廟定期市	大月桂	69
巻頭画	1	華北を語る	岩佐忠哉	75
冬の木の实	澤村幸夫 2	報道		
大陸の話	古城生 4	中国医界時事		79
婦女の地位	生島横渠 7	日本医界時事		80
中夜聞荒鷄起舞	四川銀耳 11	同仁会記事		82
駐日30年の感想	江洪傑 14	漢口通信		82
支那農村の衛生状態に就いて	田中忠夫 17	編後に		83
中国現代社会のイデオロギー	池田孝 23	付録 同慶帖		
漢方秘薬の起源(1)	本田秀彦 30			
東西還壮術今昔譚(5)	田中吉左衛門 38	第8巻第2号(昭和9年2月号)		
北島多一博士のシルエット	記者 44	巻頭画 江南の春		1
小説 長髪賊(18)	梅外山人 48	中国人の名前	西山栄久	2
歌壇	斎藤茂吉選 60	肉食者・菜食者	桃谷文治	5
詩壇	辻澤菖水選 61	人相改良論	多賀万城	7
都市紹介『新京』	米田祐太郎 62	中国恋愛革命	古城生	9
報道		民族の尊重	長野朗	13
中国社会時相	72	蜀の一斑	無余庵主人	15
中国医界時事	73	瑞鳥鳳凰について	井上哲	16
中日医薬学生談話会記事	73	満州所々(2)	武藤夜舟	20
日本医界時事	74	趙之謙之事	西川寧	26
同仁会記事	77	中華民國に於ける国際連盟の技術的工作		
編後に	77		宮島幹之助	34
第8巻第1号(昭和9年1月号)		漢方秘薬の起源(3)	本多秀彦	37
大昔の大学の講義と其筆記	福地信世 2	中国古代の社会(2)	王礼錫	45
中国の正月	瀬川浅之進 5	山東の神仙の話(1)	馬場春吉	54
日華両国民に告ぐ	内藤久寛 8	岡田和一郎博士のシルエット	記者	63
明けて春上海	四川銀耳 11	命命鳥	許地山	67
上海裏街の正月風景	井上紅梅 17	許地山と其の作品	池田孝	70
王朝元旦の詩を読む	辻澤菖水 20	同人句抄		76
青島の春	岸田英 23	同人吟詠		77
満州所々(1)	武藤夜舟 27	呼倫貝爾民族史	古川園重利	78
国際文化事業の意義	柳澤健 32	報道		
十九路軍物語	榛原茂樹 36	中国社会時相		83
中国古代の社会(1)	王礼錫 40	中国医界時事		87
漢方秘薬の起源(2)	本多秀彦 49	日本医界時事		88
長与又郎博士のシルエット	記者 57	同仁会記事		90
中国新文学の紹介	記者 61	中日学生談話会記事		91

編後に	92	中国と印度の医学	志賀潔	33	
		上海市最近十年の医薬鳥瞰 (承前)	龐京周	37	
		漢方秘薬の起源 (4)	本多秀彦	46	
第8巻第3号 (昭和9年3月号)		入澤達吉博士のシルエット	記者	54	
巻頭画 金山寺の塔	1	普陀天童行 (中)	米内山庸夫	61	
中国おもひおもひ	本田成之	2	山東の神仙の話 (3)	馬場春吉	66
華北奥地の史蹟所見	大島譲治	6	同仁句抄		72
中国の土葬風水説に就て	陶熾孫	12	同仁歌壇		73
華南の美味	澤村幸夫	15	南華の蕃族	木村兎目郎	74
道教の源流 (上)	胡哲敷	18	プロレタリア文学の全盛に就て	池田孝	78
清朝とルイ王朝	風門日阜	20	報道		
満州所々 (3)	武藤夜舟	23	中国社会時相		83
中国医界の為に	田代義徳	29	同仁会上海医院新設計画		87
上海市最近十年來の医薬鳥瞰	葉恭綽	33	日本医界時事		88
漢方秘薬の起源 (4)	本多秀彦	41	第9回日本医学会		90
稲田龍吉博士のシルエット	記者	48	同仁会記事		94
硯の起源并に其発達	飯島茂	53	編後に		96
普陀天童行 (上)	米内山庸夫	61			
山東の神仙の話 (2)	馬場春吉	67			
同人句抄		72	第8巻第5号 (昭和9年5月号)		
同人歌壇		73	巻頭画 初夏	虹雲山人	1
獠民の生活	金子二郎	74	漢音呉音之弁	福地信世	2
主潮革命文学に向ふ	池田孝	78	宗密禅師の原人論を読む	遠藤秀造	4
報道			中国南方の械闘について	田中忠夫	6
中国社会時相		84	蒙古のはなし	無余庵主人	9
中国医界時事		89	江南の竹と筍	天王寺三郎	11
第9回日本医学会		91	老子経の話	本田成之	13
日本医界時事		94	近松の錦祥女	丹澤豊子	16
中日学生談話会記事		95	喫茶新旧話	勝山一郎	19
同仁会記事		96	満州所々 (5)	武藤夜舟	21
編後に	98	中国に於ける国際連盟保健機関の活動について	海野義之	27	
			第九回日本医学会の開催に当りて	入澤達吉	30
第8巻第4号 (昭和9年4月号)			訪滬雑感	小野得一郎	35
巻頭画 龍井風景	天籟生	1	上海市最近十年來の医薬鳥瞰 (承前)	龐京周	40
江南旅の味	池田生	2	普陀天童行 (下)	米内山庸夫	47
喫茶新旧の話	勝山一郎	4	山東の神仙の話 (4)	馬場春吉	51
希望の神様	片門右衛門	7	中国匪賊遭難記	大島譲次	55
詩人としての郭沫若	大高巖	10	同仁句抄		62
硯墨使用の用語略解	飯島茂	14	同仁歌壇		63
道教の源流 (下)	胡哲敷	17	1930年以後の中国文学の動向	池田孝	64
淀の枯蘆	秋澤次郎	19	報道		
華北奥地の史蹟所見 (承前)	大島譲次	22	中国社会時相		71
満州所々 (4)	武藤夜舟	27			

中日医薬学生談話会記事	75	布施知足	47
日本医界時事	76	七理重恵	52
同仁会記事	79	藤浪剛一	57
編後に	82		64
		同人歌壇	65
第8巻第6号(昭和9年6月号)		中国現代作家列伝(2)	池田孝 66
巻頭言	1	過去	郁達夫 74
徐霞客とその子	生島横渠 2	内蒙古地方自治政務委員会の意義	
苗族の見た文明社会	水尾晶 5		古川園重利 82
交野の春	秋澤次郎 8	報道	
清末の社会小説に就いて	大高巖 11	日本医界時事	85
鵲・筍・歎冬	澤村幸夫 15	中国社会時相	87
四料簡に就いて	遠藤秀造 17	同仁会記事	88
民国に於ける麻薬の問題(1)	翁平谷 20	中日医薬学生談話会記事	90
中国本草の変遷	曹炳章 26	編後に	91
上海市最近十年來の医薬鳥瞰(承前)	龐京周 30		
欧米各地に残された東洋文化の趾	岩村成允 36	第8巻第8号(昭和9年8月号)	
アフガニスタン	布施知足 45	巻頭画 江南の初夏	夜舟 1
中国刺客物語	池田桃川 49	石坂惟寛先生のことゝも	龍孫生 2
同人句抄	56	薔薇その他の夏花	天王寺三郎 6
同人歌壇	57	東亜黎明の頃	田村重蔵 7
中国現代作家列伝(1)	池田孝 58	人事紅白	永持静香 10
報道		硯石の色彩に対する唐以後各時代好尚の変遷	
日本医界時事	65	並石色の解説(下)	飯島茂 13
中国社会時相	68	奇僧風外の洞穴生活(下)	松本赴 16
同仁会記事	70	中国に於ける麻薬問題(3)	大島讓次 21
編後に	73	辛亥革命の頃医家としての思出	須藤理助 26
		上海市最近十年來の医薬鳥瞰(完)	龐京周 34
第8巻第7号(昭和9年7月号)		中国俚謡(其二)	七理重恵 39
巻頭画 舳板	武藤夜舟 1	青磁窯を探る(上)	米内山庸夫 44
匪賊から逃れる迄	山井格太郎 2	同人句抄	55
奇僧風外の洞穴生活(上)	松本赴 5	同人歌壇	56
東亜黎明の頃	田中重蔵 7	文学の生物学的解釈	洪深 57
旧六月雷尊斎	桃谷文治 10	中国現代作家列伝(3)	池田孝 60
硯石の色彩に対する唐以後各時代好尚の変遷		英羅提の墓	郭沫若 67
並石色の解説(上)	飯島茂 12	報道	
銀河に浮かむ東洋思潮	永持静香 17	日本医界時事	73
中国に於ける新医の発達と其の現状	陳明齋 21	中国医界時事	75
中国本草の変遷	曹炳章 29	中国社会時相	76
最近十年來上海医薬界鳥瞰(承前)	龐京周 34	同仁会記事	78
中国に於ける麻薬問題(2)	大島讓次 39	編後に	81
中国を遊歴した日本名士と其の罹病			

第8巻第9号（昭和9年9月号）			国際連盟と癩			バーネット	33
巻頭画 江山秋晴		1	日本治世論			蒋廷黻	36
王国維の死	永持静香	2	中国に於ける氏族社会時代（下）			胡秋原	40
碣堡	榛原茂樹	5	青磁窯を探索（中）			米内山庸夫	46
ハロン・アルシヤンの秋	古川園重利	8	同人句抄				57
華南を一巡して	岸田英治	10	同人歌壇				58
夷族の社会	古城生	13	中国現代作家列伝（4）			池田孝	59
月餅を語る	澤村幸夫	15	自殺			茅盾	67
孫文と松方幸次郎	萱野長知	17	報道				
中国文化について疑問	多賀万城	21	米国に於ける平和運動				74
須磨の松籟	秋澤次郎	24	中国社会時相				77
中国の医薬に及ぼした道仏二教の影響			中国医界時事				81
	本多秀彦	27	日本医界時事				83
中国に於ける麻薬問題（4）	大島譲次	34	同仁会記事				86
中国俚謡（其三）	七理重恵	39	編後に				88
中国に於ける氏族社会時代（上）	胡秋原	44	第8巻第11号（昭和9年11月号）				
孫総理の広東遭難	蒋介石	51	巻頭画 青霜落群木尽見西山秋				1
大学卒業生の前途	胡適	54	日本文学観の一断片			徐祖正	2
憲法草案の経過	孫科	57	陳太傅を訪ふ			七理紫水	4
全国財政会議の結果	孔祥熙	61	満州瞥見			太田秀穂	11
同人句抄		64	最後の燕京			永持静香	15
同人歌壇		65	中国俚謡（其四）			七理重恵	20
中国諸劇を史観し改造私案に及ぶ	洪深	66	青年谷崎の北京見学			泗川銀爾	25
密約	張資平	70	蜀紅錦			丹澤豊子	27
報道			山東の回想			吉見正任	29
中国社会時相		77	周作人氏と語る			記者	36
日本医界時事		80	和漢癰瘡史談叢			烏栖刀伊亮	40
同仁会記事		82	青磁窯を探索（下）			米内山庸夫	47
中日医薬学生談話会記事		84	同人句抄				56
編後に		85	同人歌壇				57
第8巻第10号（昭和9年10月号）			中国現代作家列伝（5）			池口孝	58
巻頭画 竹蔭塔影		1	仲秋の月			周全平	66
祈雨	四川銀爾	2	中国見学者の感想			青木重次	73
耶馬溪風景論	岩村韻松	4	報道				
越南旧事回顧	桃谷文治	8	中国社会時相				75
孫文福州より日本へ亡命	多賀万城	10	中国医界時事				76
蒙古の結婚に就いて	古川園重利	14	日本医界時事				77
断金如蘭の交	岸田英	16	同仁会記事				79
満州の医療並に医育機関に就いて			中日医薬学生談話会記事				81
	小野得一郎	19	編後に				82
中国に於ける麻薬問題（5）	大島譲次	29					

第8巻第12号（昭和9年12月号）

巻頭画 漁村の斜陽	王一亭	1
南洋の中国人	高橋敏次郎	2
中国の社会経済から見た離婚問題	培悌	5
支那筆に就いて	香山梅外	8
大總統府の雅会	永持静香	12
龍之介胡琴を愛す	泗川銀爾	15
バタヴィア随想	天王寺三郎	18
孔子祭と三民主義の一大転向に就いて		

	七理重恵	21
屍体恐怖の精神分析	対島完治	26
船中雑感	禾恵生	28
中国俚謡（其五）	七理重恵	30
麻薬中毒者救護問題	生江孝之	35
同人句抄		42
同人歌壇		43
中国現代作家列伝（6）	池田孝	44
「官場現形記」について	武田泰淳	50
秦淮暮雨	倪貽徳	57
報道		

中国医界時事		62
日本医界時事		64
中国医師講習会		68
同仁会記事		71
編後に		72

第9巻第1号（昭和10年1月号）

巻頭画 猪神	香簡人	1
南京の春	矢人生	2
漫読漫筆	西川栄久	5
李太白と桃花台	香月梅外	9
新疆の婚姻風俗	伊藤左右三郎	12
尾崎士郎と上海の怪画	泗川銀爾	15
「過年」の思ひ出	永持静香	18
50年前の上海（上）	生島横渠	21
支那通	内田佐和吉	26
莫妄想	岸田英	29
巡警	禾恵生	31
勅題『池辺鶴』	秋澤次郎	34
医学随筆	柳澤健	35
お酒から見た東洋	山崎百治	39
中国疾病史考（上）	本多秀彦	49

俳壇		58
歌壇		59
蒙古風土記（1）	米内山庸夫	60
易经時代における中国の社会機構	王伯平	65
蒙古民族法の研究に就いて	柏田忠一	74
破棄	許欽文	80
嬖天下	榛原茂樹	83
浙江紹興の新年	池田孝	88
報道		

日本医界時事		92
中国医界時事		95
中国社会時相		95
同仁会記事		96
中日医薬学生談話会記事		97
編後に		98

第9巻第2号（昭和10年2月号）

巻頭画 梅花		1
文房瑣言	西川寧	2
アムールの春	白鳥香一	5
2月の南極寿星	野尻抱影	8
元相耶律楚材	烏有氏	11
赤壁の遊楽乎	MN生	15
高原春寒炉辺夜話	泗川銀爾	21
日華錯覚	永持静香	24
故郷は中国	池田桃川	27
支那人の迷信癖	濱野斗南	30

火車	禾恵生	34
中国疾病史考（中）	本多秀彦	36
漢口市の医界現状		45
易经時代における中国の社会機構	王伯平	49
俳壇		57
歌壇		58
野獣の群	米内山庸夫	59
中国新文学と世界文学との交渉	吉井稜恵	65
報道		
医界時事		73
同仁会記事		76
中日医薬学生談話会記事		76
編後に		77

第9巻第3号（昭和10年3月号）

巻頭画 山色染春烟	1
開山門	泗川銀爾 2
中国人の見た香港雑感	洛林 4
支那五代における2人の外国作家	田中忠夫 6
中国戯へ接触の憶出	森梅園 9
50年前の上海（中）	生島横渠 13
のみ・しらみの演芸	澤村幸夫 18
言葉	禾患生 20
中日医学の一交渉	佐藤恒二 22
蒙古人診療報告の中より	村田孜郎 25
中国疾病史考（下）	本多秀彦 28
国際文化事業に就いて	柳澤健 38
俳壇	48
歌壇	49
黄金	王魯彦 50
中国新文化運動の素描	吉井稜恵 58
放牧	米内山庸夫 67
報道	
日本医界時事	78
同仁会記事	81
中日医薬学生談話会記事	83
編後に	84

第9巻第4号（昭和10年4月号）

巻頭画 平橋之野趣	1
シーボルト余談	烏栖刀伊亮 2
考史余談	郭沫若 5
柳絮飛ぶ	林静 7
新来留学生の眼に映つた東京	陳琳 9
魚の女人に関する諺	澤村幸夫 11
梅一輪	岸田英 13
中部支那の特殊地名文字	内田佐和吉 17
北平の水閘と冀閘	禾患生 20
続中国医史考	本多秀彦 23
孫中山先生の十年祭に際して	藤澤親雄 31
巻頭画解説	39
中国人気質の種々	濱野斗南 40
中国教育の新動向	吉井稜恵 50
詩経に現はれた星（1）	野尻抱影 57
文選と国語国文読本	芝野六助 61
高原の花	米内山庸夫 67

俳壇	77
歌壇	78
欧米視察報告（1）	武正一 78
報道	
日本医界時事	81
同仁会記事	83
編後に	84

第9巻第5号（昭和10年5月号）

巻頭画 学柯丹丘	香衛人 1
梅蘭芳と蝴蝶	泗川銀爾 2
鍾馗と門神の身元	七理重恵 5
香椿芽その他二題	桃谷文治 10
泥濘の馬占山	白鳥香一 13
50年前の上海（下）	生島横渠 20
「ハルハ」廟事件とZ字型満蒙国境	
	古川園重利 24
印学叢談	朱其石 27
黄土積む	永持静香 31
痘瘡の東漸と病名の変遷	飯島茂 34
周時代の医学	烏栖刀伊亮 38
詩経に現はれた星（2）	野尻抱影 48
現代中国文化について	田中忠夫 52
草原民族	米内山庸夫 56
中国の端午節	吉井稜恵 67
俳壇	74
歌壇	75
酔ふ	羅黒芷 76
中華民国医事総覧の発刊に際して	
	小野得一郎 82
報道	
日本医界時事	79
同仁会記事	84
中日医薬学生談話会記事	84
編輯後記	85

第9巻第6号（昭和10年6月号）

口絵 新会長林男爵近影	
巻頭言 新旧会長送迎の辞	1
仙と聖	長瀬誠 2
孔子は甦る	村上貞吉 7
中国の文芸雑誌	上田永一 9

6月の雪と雪の聖母	梅柳居人	12	ハロン・アルシヤン行（下）	米内山庸夫	58
水上生活者三態	天王寺三郎	14	報道		
内蒙自治政府其後の動向	古川園重利	17	日本医界時事		68
偶然の重大性	且川漁夫	19	同仁会記事		71
長崎懐旧	沈儉	21	漢口医院通信		73
康德学院を訪ふ	布施知足	23	編輯後記		75
続印学叢談	朱其石	26			
中国人の婚期に関する新説	小山清次	30	第9巻第8号（昭和10年8月号）		
中国人の食物について	田中忠夫	33	卷頭画 疎林幽亭	香衡人	1
漢時代の医学	烏栖刀伊亮	40	漢人と満人との体格上に於ける二三の相違点		
俳壇		50		無求庵主人	2
歌壇		51	中国古楽の意味	石井文雄	3
女性の使命と『易』の原理に就いて			中国考古事業の過去と現在	鄭師許	8
	七理重恵	52	勝鬘院と関帝廟	難波三男	14
詩経に現はれた星（3）	野尻抱影	60	荷衣恵帯録	永持静香	17
若墨といふ医者	沈従文	64	儒教復興	F I 生	20
ハロン・アルシヤン行（上）	米内山庸夫	72	瞿秋白の最後	村田孜郎	26
報道			日本に於ける医薬学教育並に学校衛生視察所感		
日本医界時事		81		朱内光	29
中国医界時事		83	最新の中国医学衛生統計を観る	小山清次	41
同仁会記事		84	西医東漸史（下）	本多秀彦	47
中日医薬学生談話会記事		84	歌壇		56
編後に		85	俳壇		57
			戚夫人	芝野六助	58
第9巻第7号（昭和10年7月号）			書筆の話（続）	佐藤物外	74
卷頭画 翠巒	王伝燾	1	中国の中秋節	吉井稜恵	80
中国上代の工艺美术	渡邊素舟	2	同仁会上海医院建設に就いて誤りを訂す		
内藤湖南逝いて一年	澤村幸夫	6		小野得一郎	85
画仙王道源	泗川銀爾	8	報道		
民族性の立場から当面の中国問題を見る			日本医界時事		87
	田中忠夫	10	漢口通信		89
三貝子花児園	林静	15	同仁会記事		91
成吉思汗の墓に関する論争	吉川園重利	18	編後に		95
粒食と胃腸	多賀万城	23			
デヤイルスの死	NM生	26	第9巻第9号（昭和10年9月号）		
日本中国及西洋の按摩術	無求庵主人	28	卷頭画 碧山過雨		1
広西省の衛生概況	山口縣造	32	医学と音楽	I・F生	2
西医東漸史（上）	本多秀彦	37	中国人と自殺	斗南生	3
歌壇		46	中華民国産婦の坐月、嬰兒の洗三及命名に		
俳壇		47	就いて	無求庵主人	5
転換期に面せる日本の対中国態度	長瀬誠	48	思出の石と印	下島空谷	7
書筆の話	佐藤物外	51	英雄事業又思君	布施知足	11

国外から観た日本の医業	尾川順太郎	14	女人行路長江の巻	泗川銀爾	4
満漢民族の人種的見聞談	高杉新一郎	16	哀れなる人々	長谷川兼太郎	6
中国医界名士座談会		22	楊朱の自我主義と近代思潮	呂振羽	10
最新の中国医学衛生統計を観る	小山清次	34	満州の医事衛生に就いて	梶尾貞吉	14
歌壇		40	衛生問題を中心とした厦門事情	蘇子卿	25
俳壇		41	麻薬慢性中毒症(1)	酒井由夫	34
中華民国之近情と日華関係之良導			中国に於ける社会衛生及び医学教育		
	坂西利八郎	42		タンドラー	40
東洋思想と西洋思想	石井文雄	54	欧米視察報告(2)	武正一	53
殷墟卜辞	長瀬誠	58	歌壇		59
中国戯劇概観(上)	郭虚中	65	俳壇		60
原始民族の遺跡を探る(上)	米内山庸夫	73	中国風俗研究への緒言	何炳松	61
報道			原始民族の遺跡を探る(下)	米内山庸夫	69
日本医界時事		84	報道		
中日医薬学生談話会記事		86	日本医界時事		80
同仁会記事		87	中国医界時事		82
編後に		88	同仁会記事		84
			人事		86
			編後に		88
第9巻第10号(昭和10年10月号)					
巻頭画 万里行旅	先春居主人	1	第9巻第12号(昭和10年12月号)		
蘇曼殊と逗子	陶熾孫	2	巻頭画 雪中訪友		1
医と信仰	F・I生	4	30年前日本名士一団の南京行	布施知足	2
秋10月女人行路	泗川銀爾	6	木魚書	澤村幸夫	6
満州視察摘記	北島多一	9	女人行路南国の巻	泗川銀爾	9
中国医界と医学用語其他	下瀬謙太郎	17	承認の承認	岸田英	11
中西の医を語る	銖庵	23	中国のサイエンス並衛生機関瞥見	小泉丹	14
中国に於ける新医学者分布	朱席儒	25	南昌市小学校児童の寄生虫卵	熊俊	23
中国重要都市に於ける衛生費	李安廷	33	鎮江に於ける住血虫	洮永政・祝海如	31
歌壇		45	湖南省に於けるマラリヤ病	G Hピアソン	38
俳壇		46	薬名の漢字訳に就いて	矢来里人	40
原始民族の遺跡を探る(中)	米内山庸夫	47	歌壇		45
中国戯劇概観(下)	郭虚中	55	俳壇		46
報道			日本内地在留中国人の小学校	張嘉鏞	47
日本医界時事		62	欧米視察報告(3)	武正一	51
中国医界時事		64	中国封建社会の素描	長瀬誠	65
同仁会記事		67	中国西南地方蕃人の文化(1)	武田泰淳	72
飛鴻帰雁録		68	中国新文化運動の素描(続)	吉井稜恵	82
編後に		69	報道		
			中国医界時事		89
第9巻第11号(昭和10年11月号)					
巻頭画 採薪	柳莊	1	日本医界時事		91
呉織, 漢織の古里	天王寺三郎	2	同仁会記事		94

編後に	97	天津の梁山泊を憶ふ	小山草衣人	16
		天王寺のふくろふ鳥	澤村幸夫	20
第10巻第1号（昭和11年1月号）		王仁の入蒙と満大施療班	長谷川兼太郎	23
巻頭画 氷鼠	香衛人	1	歌壇	27
東京随筆	冰瑩	2	俳壇	28
支那学の偉さ	田中吉左衛門	4	中国医事座談会	29
北平うはさ聞書	宗天紫蘭	5	中国阿片考拾遺	王世恭 47
支那ところどころ	七理重恵	7	詩壇	51
留日中国学生側面観	向愚	12	槃瓠神話の考察	鍾敬文 53
似非医一祝由科	澤村幸夫	16	浙江省の畚民	西川栄久 56
古武士と素町人	泗川銀爾	18	満州回顧録（2）	小川勇 62
中国の正月	内田佐和吉	21	報道	
30年前日本名士一団の南京行（承前）			中国社会時相	70
	布施知足	28	中国医界時事	72
中国の新年	瀬川浅之進	31	日本医界時事	76
歌壇		33	同仁会記事	78
俳壇		34	編後に	79
中国の中央衛生組織	南崎雄七	35		
慢性麻薬中毒症（2）	酒井由夫	48	第10巻第3号（昭和11年3月号）	
中国の簡体字並に国語運動一般	下瀬謙太郎	55	巻頭画 春風寒	1
中国医界見聞談	山井格太郎	61	日本に於ける孔子の正裔	馬場春吉 2
詩壇		70	王仁三郎の入蒙と満大施療班（上）	
中国の民間伝承に現はれた鼠	鍾敬文	72		長谷川兼太郎 6
中国西南地方蕃人の文化（2）	武田泰淳	86	福昌華工を語る（上）	本多秀彦 10
骨董の話	岩村韻松	100	貴妃の温泉とその地方の風習	倚萍 15
満州回顧録	小川勇	105	台湾医界雑感	錫康 16
報道			庫論を語る	玉井莊雲 18
中国医界時事		118	中国画行脚	服部亮英 21
日本医界時事		119	中国新医史稿	陶熾孫 26
大連医院を見る		121	民国禁制薬品問題	布施知足 33
同仁会医院長会議		125	国語愛護同盟医学部新年座談会	36
同仁会記事		128	俳壇	46
中日医薬学生談話会記事		129	歌壇	47
編後に		130	槃瓠神話の考察（中）	鍾敬文 48
付録 昭和11年度同慶帖			満州回顧録（3）	小川勇 58
			書画骨董の話	岩村韻松 65
第10巻第2号（昭和11年2月号）			詩壇	71
巻頭画 天空海濶		1	報道	
『外国人が見たら』の感	西東野人	2	中国社会時相	73
扶桑飯語	華雲彰	4	中国医界時事	77
猗園札記	西川寧	6	日本医界時事	85
寒山寺の詩碑に就いて	七理重恵	10	同仁会記事	87

編後に 88

第10巻第4号(昭和11年4月号)

巻頭 内田伯悼辞	1
山水と自然景物の観賞 郁達夫	2
春光蝶鳥譜 天王寺三郎	4
儒林外史雑話 野々村正雄	6
八達嶺の旅 大高巖	10
王仁三郎の入蒙と満大施療班(下) 長谷川兼太郎	13
支那から帰つて3年 木内旦川	16
福昌華工を語る(下) 本多秀彦	19
漢口の紀元節 安部清	21
漢方医学と泰西医学 引地興五郎	23
民国の禁制薬品問題(承前) 布施知足	33
歌壇	40
俳壇	41
満州回顧録(4) 小川勇	42
槃瓠神話の考察(下) 鍾敬文	48
詩壇	61
報道	62
中国社会時相	62
新生活運動2周年記念大会/禁阿片運動其後の 情況/中国々民教化運動愈熾烈/中華慈幼協会 近況	
中国医界時事	75
中国各地時症概況/衛生施設近状/中医条例公 布顛末と公布の影響/医療機関増補現況其他	
日本医界時事	87
同仁会記事	90
編輯後記	92

第10巻第5号(昭和11年5月号)

巻頭画 清江帆影	1
史に見る中国の時疫 桃谷文治	2
海南島情景 林信生	4
中国画の彫刻鑑賞者への警鐘 泗川銀爾	5
察哈爾の田舎旅行 片山英夫	8
文選の大いなる所似 芝野六助	11
天問室瑣語 静君	15
歌壇	19
第一線のこえ	

同仁会の中国指導精神を論ず 石鳴居主人	20
中国に学校を 石橋俊	22
所感二ツ 寺崎由太郎	23
文化事業の意義 偏見散人	26
俳壇	28
民国禁制薬品問題(承前) 布施知足	29
江蘇省立鎮江郷区衛生実験区報告	36
察・綏・大同・医薬衛生概況 林公際	40
詩壇	45
満州遍路(1) 米内山庸夫	46
蒲松齡の遺稿に就て 平井雅尾	57
満州回顧録(5) 小川勇	65
報道	
中国社会時相	71
1.孫総理逝去紀念会/2.社会統計/3.社会雑 報	
中国医界時事	77
1.医事会議/2.国医記事/3.医事教育/4. 医事雑報/5.医療機関	
日本医界時事	83
同仁会記事	87
編輯後記	90

第10巻第6号(昭和11年6月号)

巻頭画 谿口の雲 香衛人	1
1本の歯と1粒の朴の実 天王寺三郎	2
ワンパオツオー 泗川銀爾	3
天問室瑣語続編 静君	6
部屋に聞く 寺崎由太郎	11
燕石 丹澤豊子	16
黒瞎子哀話 H・H生	18
梅雨考 甲山生	21
長江風景 服部亮英	27
民国禁制薬品と日本 布施知足	30
医薬分業国としての中国 引地興五郎	37
詩壇	41
他山の石	
庚子賠償金による英米の文化事業	42
医学留学生派遣について	46
日本対華文化事業の積極化	47
科学的に見た中国古楽の声律論 石井文雄	51
満州遍路(2) 米内山庸夫	64

歌壇	75	田中忠夫	13
俳壇	76	寺崎由太郎	16
報道		藤川貞三郎	19
中国社会時相	77	桃谷文治	25
中国医界時事	84	服部亮英	28
日本医界時事	93	全漢昇	32
同仁会記事	95	藤浪剛一	39
中華民国文化機関要覧特輯の辞 小野得一郎	99		
編後に	100		

第10巻第7号（昭和11年7月号）

巻頭画 瀑布	1
扁鵲の墓 龍孫生	2
遷り行く中国農村の一面 王興瑞	3
史前史後の穴居 澤村幸夫	5
家庭教師展堂先生 小山草衣人	7
発明の偶然 Y・H生	10
中国詩修辭零拾 静君	11
老儒章太炎氏を悼みて 七理重恵	14
長江風景 服部亮英	18
清末に於ける西医の輸入について 全漢昇	22
中国科学界管見 小宮義孝	32
禁薬と国民政府 布施知足	35
中華民国訪問記（上） 藤浪剛一	38
詩壇	47
満州回顧録（6） 小川勇	48
歌壇	60
俳壇	61
報道	
中国医界時事	62
中国社会時相	71
日本医界時事	76
同仁会記事	78
青島医院巡回診療／済南医院巡回診療	
編輯後記	91

第10巻第8号（昭和11年8月号）

巻頭画 月影	1
中日聯合学士会のこと 布施知足	2
露訳されゆく中国文学 狄謨	7
明治38年晩秋北京の一日 故宮本叔遺稿	9
中国に於ける客の歓待とその新解釈	

話		石井文雄	54
漢口由来			
成吉思汗の陵墓祭			
長江風景			
清末に於ける西医の輸入について			
中華民国訪問記（下）			
歌壇			52
俳壇			53
支那文学の音楽的特性			
冷温浴の起源と発達殊に混堂に就いて			
飯島茂			63
詩壇			71
報道			
中国社会時相			72
中国医界時事			81
日本医界時事			86
同仁会記事			88
北京医院巡回診療班			91
編輯後記			95

第10巻第9号（昭和11年9月号）

口絵 同仁会主催第1回医学大会	
巻頭画 湖江観月	1
留日中国学生の立秋雜感 王伯益	2
アランギヤ・ラギヤの性薬 布施知足	4
蚊取線かう煙のもつれ 三秋	8
姜太公在此 天王寺三郎	10
聊齋小曲 平井雅尾	12
長江風景 服部亮英	15
中華医界見学報告 尾河正夫	19
フランスの庚子賠償返還金	27
俳壇	30
尼姑思俗曲 柳泉作	31
満州回顧録（7） 小川勇	37
清商樂の主樂器に就いて 石井文雄	49
詩壇	56
報道	
中国医界時事	57
中国社会時相	62
日本医界時事	67
同仁会記事	69

同仁会主催第1回医学大会	71	蠅躑漫談	吉村春枝丸	64	
編輯後記	76	五行説と生命現象	田中吉左衛門	65	
		偶感	有馬頼吉	66	
		黄山遊記	後藤朝太郎	67	
第10巻第10号(昭和11年10月号)		医科器械製作家一行の渡華を送る	入澤達吉	70	
『同仁』創立十周年記念増大号		陶元慶及其作品	許欽文	73	
題字 沢如時雨 林権助		中国医界論叢			
親仁愛衆 許世英		新旧医学の交替期に於ける期望	郭琦元	77	
卷頭画 谿山無尽	香衡人	1	新旧医業に関する私見	劉日永	78
同仁の創刊十周年に際して	小野得一郎	2	中国医事の現状とその改革方法	濤鳴	80
仁術に国境なし	下村海南	4	濤鳴氏の「中国医界の現状とその改革方法」に		
青島一瞥	陶熾孫	5	対する批判	陳志潜	88
漢医語玩味	澤弼	8	中国医界視察談	永井潜	96
文明の余沢と子供の体質	植林篤三	10	中国医界談片	遠山郁三	109
新京・北平・張家口	宗天紫蘭	12	漢・魏・南北朝時代に於ける外来医術及び藥物に		
無題漫語	上田恭輔	19	に関する考証	陳竺同	114
開業医の昔と今	長尾美知	21	中華民國医事衛生座談会		122
悪並等	近藤乾郎	24	湯蠡舟, 黄希明, 戴尚文, 孫道夫, 章志青, 佐		
東坡医事	小川政修	25	藤恒二, 下瀬謙太郎, 山井格太郎, 小野得一郎,		
超越気分致富む中国人の生活	遠藤秀造	28	金子義晃, 橋本五郎, 穂坂唯一郎, 曹欽源		
新聞記事の扱方に就いて	高田富蔵	31	民国に於ける漢藥研究の現況	引地興五郎	134
寒さ	下島勲	33	中国医事研学報告	岸田壮一	139
単純	松岡鋭作	36	赤峰の町	武藤夜舟	145
詩人の技巧	西脇玉峰	37	朝鮮に於ける同仁会事業の追憶	佐藤剛蔵	147
携帯便所	佐藤四郎	45	同仁俳壇		163
中国に対する文化外交の一考察	飯田龍泉	47	中国学の基礎工作	布施知足	164
杭州の思ひ出	楠瀬日年	51	玉堂春に就いて	七里重恵	170
国字に就いて	石橋松蔵	52	雲南の夏	高橋惇	179
四川省といふところ	澤村幸夫	54	書経に見たる經濟地理学的思想	野口保市郎	197
同文よりも同音	浅田一	57	日華の文化提携	石井文雄	202
同仁創刊十周年に当り	4-57		満州回顧録(8)	小川勇	209
巴陵宣祐, 川上漸, 平河公行, 藤井尚久, 草間			同仁詩壇		219
芳雄, 井上康治, 津崎孝道, 加藤長三, 石川憲			報道		
夫, 逸名, 及川邦治, 弘中進, 木下東作, 庄司			中国社会時相		221
義治, 蘇記之, 飯島茂, 山田益彦, 湯爾和, 王			中国医界時事		232
大徳, 宮島幹之助, 無声庵主人, 西山栄久, 陶			日本医界時事		237
熾孫, 澤村幸夫, 容軒生, 李祖蔚, 濱野末太郎,			同仁会記事		239
侯希民, 高田義一郎, 増山梅亭, 芝野六助, 石			編輯後記		242
井愛亭, 前田設園					
莫愁湖浜仲秋漫録	泗川銀爾	59	第10巻第11号(昭和11年11月号)		
開業医の将来	中楯幸吉	61	卷頭 秋江の漁舟		1
日記の一節	菱崖逸士	62	民国政府の新に發表した化学元素の名称		
救療と救済	飯村保三	63			

合浦の珠	下瀬謙太郎	2	日本医界時事	86
楠木の棺	桃谷文治	3	同仁会記事	89
訳詩鴉羽	神崎清	6	編輯後記	92
酒の論	井田啓勝	11		
葛根廟舞楽（上）	前田設園	12		
蒙古の旅から帰つて	長谷川謙太郎	13	第11巻第1号（昭和12年1月号）	
南京よもやま話	宗天紫蘭	18	卷頭画 牛	香笛人 1
長江画帖	小山草衣閑人	20	支那料理と日本料理	木下東作 2
中国視察談	服部亮英	23	元旦の垂涎拝観記	泗川銀爾 4
Z・O・Pブランドの中国亜片論	浦本政三郎	27	長寿者	澤村幸夫 6
中国法医学史	布施知足	36	日華文化の交流	田中忠夫 8
中国医事研学報告	孫達方・張養吾	42	鬧房・聴房	井田俳愚 11
孟子と井田制	岩戸三治	48	漢口の暮から正月	寺崎由太郎 15
釣合の取れぬ偶力（上）	莫非斯	56	夜雨思夫曲	平井雅尾 20
満州回顧録（9）	張資平	61	上海雜感	黒屋政彦 22
報道	小川勇	71	民国政府に於て医学用語の統一を完成せる経過	
中国社会時相		83		下瀬謙太郎 26
中国医界時事		95	地方志に記載された中国痘疹略考	井村峰全 32
日本医界時事		105	漢・魏・南北朝時代に於る外来医術及藥物に関する	
同仁会記事		107	考証（承前）	陳竺同 37
			支那に旅して	小野得一郎 44
			亜米利加に於ける日本語	志賀潔 46
			六十年前の北支那紀行	布施知足 51
			漢土より取材せる謡曲の三四を鑑賞して（1）	
				七理重恵 58
			清末の諷刺文学について	武田泰淳 65
			湖畔	脩甫 75
			報道	
			中国社会時相	79
			中国医界時事	84
			日本医界時事	95
			同仁会記事	96
			同仁会青島医院第二回巡回診療報告	99
			医科器械業者中国視察団報告	107
			日本医科器械業者代表中国医界視察団紀行（1）	
				森悦五郎 113
			編輯後記	119
			付録 昭和12年同慶帖	
			第11巻第2号（昭和12年2月号）	
			卷頭画 早春	1
			大阪に於ける七十七代の正裔故孔德冕君	
			及其の母子	田崎仁義 2

拳兵から亡命	須藤理助	4	同仁会記事	93
黄浦江淡水のいはれ	天王寺三郎	7	日本医科器械業者代表中国医界視察団紀行(3)	
だが心配御無用	A生	10	森悦五郎	94
大陸の波物語	山本耕橘	12		
阿片鬼の厄年	泗川銀爾	13	第11巻第4号(昭和12年4月号)	
安陽王伝説	高橋惇	17	巻頭画 春霞	1
満州馬賊の隠語	王世恭	21	左利問題	飯島茂 2
鮮満支遍歴所感	佐藤秀造	23	蠱といふもの	澤村幸夫 7
中国に於ける看護人養成事業の概略	李令棟	33	日本とリーダーシップ	清水郁子 9
眼科患者より観たる中国の医事衛生	石橋俊	36	薔薇水	水野美知 13
60年前の北中国紀行	布施知足	40	日本の婦人を讃ふ	筱坪 14
蒙古草原に行く	米内山庸夫	47	黄鶴楼にある墓二つ	野々村正雄 16
報道			現代医学と漢方と民間療法と	西端驥一 19
中国社会時相		59	皇漢医学といふもの	布施知足 24
中国医界時事		64	消毒・煙一色時代を将来す	泗川銀爾 28
日本医界時事		73	漢・魏・南北朝時代に於ける外来医術及び薬物に関する考証(承前)	陳竺同 33
同仁会記事		75	癌のはなし	久留勝 38
同仁会済南医院第二回秋季巡回診療報告		77	天目山に登る	米内山庸夫 49
日本医科器械業者代表中国医界視察団紀行(2)			故内田伯一周年追悼	
森悦五郎	84		挨拶	林権助 63
編輯後記	92		故内田伯と忠恕	小幡西吉 64
第11巻第3号(昭和12年3月号)			日露戦争当時の伯爵	松井慶四郎 66
巻頭画 桃源		1	故内田伯爵の情誼	山井格太郎 68
敵愾の觀念	宗天紫蘭	2	故内田伯の好運	徳富猪一郎 70
旅人の目に映つた満州	河内山賢祐	3	外交に於ける故内田伯の足跡	幣原喜重郎 73
自然を喫する『野茶』	桃谷文治	8	非常時に際して内田伯を偲ぶ	若槻礼次郎 75
古螺城址	高橋惇	10	故内田伯の追悼会に列して	小野墨堂 78
趣味の選択	龍孫生	15	報道	
孔家第五府に就て	馬場春吉	19	中国社会時相	80
私共の既に研究した和漢薬に就て	阿部勝馬	23	中国医界時事	87
中国医界視察団報告	市河顕純	29	日本医界時事	92
阿片吸食の禁断	泗川銀爾	33	同仁会記事	98
中国結核予防協会の近況と計画	顔福慶	36	日本医科器械業者代表中国医界視察団紀行(4)	
中国に於ける漢西両医	布施知足	41	森悦五郎	100
漢・魏・南北朝時代に於ける外来医術及び			編輯後記	109
薬物に関する考証(承前)	陳竺同	45		
錢塘江を溯る	米内山庸夫	60	第11巻第5号(昭和12年5月号)	
報道			口絵 同仁会東京医院	
中国医界時事		72	巻頭言 同仁会東京医院落成に際して所懐を述ぶ	
中国社会時相		86	金子義晃	1
日本医界時事		91	唐有壬父子の事	澤村幸夫 4

中国の婦人譚	本郷清和	7	中国に最も適した歯科医制度は何か	A・W・リンゼイ	37
半世紀前の上海	泗川銀爾	11	中国に於いては如何にして歯科医の地位を		
漢土から取材した謡曲の三四を鑑賞して(2)	七理重恵	14	確保せしむべきか	同人	41
徽宗皇帝とその書	小平総治	19	無資格歯科医の処置如何	張楽天	45
孔子と仁	石井文雄	20	最近の中国歯科医界(1)	劉瀨章	47
中国に於けるカラ・ザールの研究概要			結核のはなし	濱野規矩雄	52
	同仁会調査部	23	中華民国重要日誌		57
中国医学教育の今後	常時煥	33	芸術管見	逝水山人	61
中華医学会第四回大会		37	湖州	米内山庸夫	66
中華重要日誌		37	報道		
中華医学会第4回大会開会に際して	朱恒璧	45	中国社会時相		71
トラホームのはなし	山崎順	48	中国医界時事		79
保健と治病の真髓	国島貴八郎	54	永井潜博士北平大学名誉教授就任の挨拶		85
西湖の春	米内山庸夫	66	日本医界時事		87
報道			同仁会記事		89
中国社会時相		75	中日医薬学生談話会記事		93
中国医界時事		83	東京医院開院披露		91
日本医界時事		89	日本医科器械業者代表中国医界視察(6)		
カラ・アザール病診療研究団に就いて				森悦五郎	96
	佐藤秀三	92	編輯後記		108
同仁会記事		95			
日本医科器械業者代表中国医界視察団紀行(5)			第11巻第7号(昭和12年7月号)		
	森悦五郎	101	巻頭画 新緑溪行		1
編輯後記		104	中国人に関する二三の思出	小池重	2
			漢方の実相	田中吉左衛門	5
第11巻第6号(昭和12年6月号)			東洋人的な孫文	澤村幸夫	6
巻頭画 九夏松風	香箇人	1	医学から見た茶の話	武田太郎	8
同仁会東京医院の落成を祝す	小野得一郎	2	宋の徽宗欽宗二帝の満州遷徙	小平総治	13
鬼子と大人と釘梢	天王寺三郎	4	前門の虎後門の狼	逸霄女士	18
病める白薇女士を訪ふ	逸霄女士	6	日華両医学者提携の私案	久野寧	20
李白と武漢	野々村正雄	8	最近一ケ年間に於ける中国の医学教育		
方法を有たぬ運動	布施知足	10		朱季青	33
漢土より取材せし謡曲の素材について(続)			最近の中国歯科医界(2)	劉瀨章	48
	七理重恵	14	中華民国重要日誌		56
鉄拐の顔	武田泰淳	17	最近の中国	雨宮巽	58
漢訳白骨章	禅寺仏僧	19	上林湖	米内山庸夫	71
日華両国の医学用語統一の要否			報道		
	佐藤恒二	21	中国社会時相		82
中華民国に於ける歯科医の問題			中国医界時事		87
	同仁会調査部	32	日本医界時事		94
学校歯科衛生施設私案	蔣長椿	33	同仁会記事		97

北京医院第2回巡回診療	100
日本医科器械業者代表中国医界視察団紀行(7)	
森悦五郎	102
編輯後記	119

第11巻第8号(昭和12年8月号)

巻頭画	香衛人	1
二詩丐	馬場春吉	2
広西省の歌垣	賈農	3
浦敬一を憶ふ	宗天紫蘭	6
張之洞の学堂歌	布施知足	8
中日議和記略	天王寺三郎	11
凄艶動人的態	逸霄女士	13
満華の旅から	石原清子	15
東洋医術の現代性	内山孝	19
中国に於ける護士問題	同仁会調査部	28
護士学校の学制改革について	花新人	39
護士業今後の見越し	李令棟	43
中国護士事業の検討	蔣野萍	48
最近の中国歯科医界(3)	劉瀨章	52
中華民国重要日誌		57
玉泉山と長坂坡	米内山庸夫	60
報道		
中国社会時相		64
中国医界時事		67
日本医界時事		70
同仁会記事		73
第2回北京医院巡回診療(2)		75
日本医科器械業者代表中国医界視察団紀行(8)		
森悦五郎		81

第11巻第9号(昭和12年9月号)

巻頭 政府声明		1
日支事件と同仁会		2
北支事変後の北京医院		7
漢口医院引揚げ事情		17
済南医院の青島に引揚げまで		24
青島医院遂に引揚げ		28
漢口引揚げの記	武正一	35
済南医院惜別の感懐	外田麟造	41
青島を去つて	栗本定治郎	46
同仁会記事		50

編輯後記	56
------	----

第11巻第10号

口絵		
宮城の奉拝に赴いた同仁会診療救護班		
同仁会診療救護班の明治神宮参拝		
同漢口医院班		
同青島医院班		
同済南医院班		
同仁会診療救護班四景		
巻頭言 同仁会診療救護班各位に告ぐ		
同仁会会長男爵 林権助		2
同仁会活躍の秋		3
同仁会診療救護班の北支派遣		5
其後の北京医院		10
会報		15
同仁会青島医院見学記	足助又次	16
馬鼻疽の人体感染	葛西勝弥	24

第11巻第11号(昭和12年11月号)

巻頭言 北支の旅行より得たる感想(1)		
小野得一郎		2
同仁会診療救護班開始情況		4
同仁会診療救護班日誌抄		6
同仁会診療救護班漢口班近況		9
同 青島班近況		10
同 済南班近況		12
北京医院の近況		14
同仁会診療救護班と伴に	小野得一郎	17
北支に十大病院を建設せよ	西村泰	35
武正一博士に支那の医業状態を訊く		37
雑報		54

第11巻第12号(昭和12年12月号)

口絵 同仁会診療救護班の活動		
巻頭言 北支旅行より得たる感想(2)		
小野得一郎		2
日支文化工作の一断面	七理重恵	4
北京滞在中の所感	永井潜	9
ソ満の秘境に『クミス』を求めて	武井正衛	19
戦線に衛生陣を窺く		28
湯爾和先生のシルエット		33

雑報	35	七星板のこと	野尻抱影	13
会報	38	日支医の提携	田中利雄	16
同仁会診療救護班総務報告	40	ポロ色の支那服	谷口清子	17
青島医院班／済南医院班	41	北支の旅行より得たる感想（4）小野得一郎	19	
編輯後記	51	カラ・アサールの予防及検査に就いて		

第12巻第1号（昭和13年1月号）

巻頭画 山獣之君	1	北支産業衛生の特殊性	石井信太郎	22
年頭の感	2	非常時と食物の革命	三田谷啓	32
北支今後の衛生建設に対する希望 侯毓汶	3	中国歯科医小史	劉瀨章	37
北支衛生対策の要諦 入澤達吉	5	詩		43
真の親日は知日から 孫魁舟	7	幕府御殿医高木済庵（中）	小野田亮正	44
同仁会病院事業に対する卑見 飯島茂	9	蘇州の曾遊を憶ふ	小野墨堂	48
日支医学の提携を提唱す 佐多愛彦	11	報道		
大公無私の文化であれ 澤村幸夫	13	日本医界時事		52
北支の文化工作に就いて 布施知足	15	同仁会診療救護班の1月		54
事変下の中国大衆に対する文化工作と医療		同仁会診療救護班通信		56
		同仁会記事		61
	七理重恵	編輯後記		63
	19			
聖戦の後に来るもの 永持静香	22			
北支の旅行より得たる感想（3）小野得一郎	25			
精神病学から見た日支事変 金子準二	27			
支那事変と青島 安藤重郎	33			
中国雑感 武正一	39			
四十年前の威海衛 龍孫生	45			
詩	52			
幕府御殿医高木済庵（上） 小野田亮正	54			
報道				
日本医界時事	58			
雑報	60			
同仁会記事	61			
診療救護班第2回派遣				
編輯後記	69			
同慶帖				

第12巻第2巻（昭和13年2月号）

巻頭言 対支文化工作の一基調	小野得一郎	1	診療室に現はるゝ支那性格（上）	本村儀作	43
啓蒙運動としての医業	布施知足	2	詩	萩原錦江選	47
『仁術』の具現	串田幸次郎	5	幕府御殿医高木済庵（下）	小野田亮正	48
威海衛の環翠樓記に就いて	飯島茂	5	報道		
大隈侯の追憶	峰直次郎	8	日本医界時事		52
英人に学ぶべきもの	澤村幸夫	9	中国医界時事		55
沙蟲に就いて	田中敬助	11	同仁グラフ		

第12巻第3号（昭和13年3月号）

巻頭言 支那の医界事情を調査研究せよ		
	専務理事 田邊文四郎	1
鳳陽と明太祖	西山栄久	2
交友難	鷗月左青	5
五台山に登れる人々	天王寺三郎	11
儒教の經典に見えたる食物と衛生思想の三四		
	七理重恵	13
新礼楽主義を提唱す	石井文雄	16
東洋文化進展を観点とせる聖戦及び其の聖果		
	永持静香	19
北支の旅行より得たる感想（5）	小野得一郎	22
日本の使命	新垣恒政	25
支那に於ける風土病	宮川米次	27
馬鼻疽の人体感染	葛西勝弥	33
医薬侵略	布施知足	38
診療室に現はるゝ支那性格（上）	本村儀作	43
詩	萩原錦江選	47
幕府御殿医高木濟庵（下）	小野田亮正	48
報道		
日本医界時事		52
中国医界時事		55
同仁グラフ		

同仁会記事	61	葉根譚の書誌学的研究（上）	佐藤物外	45
幹部更迭、中支派遣第1診療班の編成、北支派遣各地診療班の2月、雑報		伝馬町牢医望月寿仙（中）	小野田翠雨	53
編輯後記	72	報道		
第12巻第4号（昭和13年4月号）		同仁グラフ		
巻頭画 江南の早春	鈴木信夫 1	日本医界時事		57
二人の支那人	西端驥一 2	中国医界時事		59
新支那の明朗化を妨げる者	高田義一郎 6	同仁会記事		62
日語欧語	鵜月左青 9	編輯後記		67
秦の徐福の墓	澤村幸夫 13	第12巻第6号（昭和13年6月号）		
中国装入門	泉九郎 15	同仁会顧問故岡田和一郎先生追悼号		
診療室に現はるゝ支那性格（下）	本村儀作 18	誄		1
或日の食堂	20	同仁会顧問故岡田和一郎先生の薨去を悼み謹みて追悼記念号を御霊前に捧呈す		
邦人北支進出と医政	石原修 22	主幹 田邊文四郎	2	
東洋に於ける阿片吸食の伝播史実	酒井由夫 28	弔辞 同仁会会長 男爵 林権助	3	
支那に於ける教医	布施知足 33	弔辞 外務大臣 陸軍大将 宇垣一成	4	
詩	萩原錦江選 39	弔辞 東京帝国大学総長 長与又郎	5	
伝馬町牢医望月寿仙（上）	小野田翠雨 40	弔辞 東京医学会会頭 石原忍	6	
報道		岡田和一郎先生の追憶	増田胤次	7
中国医界時事	44	岡田先生のことゝも	颯田琴次	10
日本医界時事	47	岡田博士の置土産	広瀬渉	12
金井章次といふ人	50	岡田和一郎先生の昇天を哭す	本田雄五郎	13
同仁グラフ		我校長岡田和一郎先生を憶ふ	上条秀介	20
同仁会記事	51	謹むで恩師岡田先生を悼む	山本常市	22
編輯後記	66	中国に於ける医育機関を如何にすべきや	林春雄	27
第12巻第5号（昭和13年5月号）		篤志救護班を追想して医家の信念に及ぶ		
巻頭画 初夏	小野寺梅丘 1	脇田政孝	30	
支那への認識	竹内尉 2	医学の危機の問題に関連して	馬場和光	37
北京の桜	金崎賢 6	詩	萩原錦江選	41
日本僧の偉らさ	天王寺三郎 7	葉根譚の書誌学的研究（中）	佐藤物外	42
柳条辺牆と金の辺堡（上）	長谷川兼太郎 10	同仁グラフ		
支那の国家主義と外国伝道	布施知足 13	伝馬町牢医望月寿仙（下）	小野田翠雨	49
民族衛生の立場から戦後に於ける衛生対策に就て		報道		
	中楯幸吉 18	日本医界時事		54
支那医学の理解	馬場和光 22	中国医界時事		56
満支から伝播の恐ある伝染病と其対策		同仁会記事		60
	石原房雄 25	第12巻第7号（昭和13年7月号）		
所謂『銃後衛生』の示標	石原修 30	巻頭画 農郷何処	小野寺梅丘	1
太原を語る	栗本定治郎 35	支那事変に直面して吾等の覚悟		
詩	萩原錦江選 44			

同仁会理事故入澤達吉先生の薨去を悼み奉る	主幹 田邊文四郎	2
弔辞	林権助	3
弔辞	荒木貞夫	4
弔辞	佐藤寛次	5
入澤達吉翁と拙者	金杉英五郎	7
恭輓雲莊入澤博士賦二律	国府種徳	17
入澤さんを憶ふ	江口定條	18
入澤先生の3つの大きな業績	林春雄	20
恩師入澤先生を偲びて	宮川米次	24
入澤先生の追憶	増田胤次	53
入澤先生と同仁会	小野田得一郎	56
入澤先生について一つの思出	下瀬謙太郎	60
恩師入澤先生を憶ふ	武正一	62
「入澤先生と支那」に関することゝも	藤井尚久	65
入澤先生の御病歴	坂本恒雄	74
同仁会記事		68
同仁会日誌		79
編輯後記		82

第12巻第12号（昭和13年12月号）

北支・中支に於ける同仁会の診療班・防疫班の活動に就て	宮川米次	1
北支防疫班の活動状況	高木逸磨	11
天津滄洲及杭洲に於ける診療体験	武正一	19
北京及青島に於ける診療体験	栗本定治郎	28
石家莊・正定及済南に於ける診療体験	外田麟造	32
南京に於ける診療体験並に支那人の特殊疾病に就て	岡崎祇容	38
山西に於ける民衆防疫及診療体験	越川彰	48
同仁会北京医院の現況	塩澤七晟	53
南京市立小学校児童体格検査成績表	岡崎祇容	62
同仁会記事		85
同仁会日誌		86
編輯後記		88

第13巻第1号（昭和14年1月号）

写真 皇太后陛下より同仁会に賜れる御沙汰 皇太后陛下の御沙汰に就て謹話	近衛文麿	1
--	------	---

畏き御沙汰を拝して謹話	林権助	2
支那の医事衛生に就て	宮川米次	3
『コレラ』の診療並に上海に於ける支那人の疾病に就て	瀬尾省三	38
南京市民疾病観（第2号ノ1）	岡崎祇容編	46
Active of the Japanese Medical Corps in China	Yoneji Miyagawa	76
同仁会記事		82
同仁会日誌		83
編輯後記		85
付録 昭和14年同慶帖		

第13巻第2号（昭和14年2月号）

上海に於ける医事衛生施設並にコレラ赤痢の二三事項に就て	瀬尾省三	2
南京市民疾病観（第2号ノ2）	岡崎祇容編	6
第四診療班（太原）各科集談会抄録		26
徐州診療班5ヶ月間の回顧	三輪舜	32
同仁会支那派遣診療班物故者追悼記事		39
同仁会記事		62
編輯後記		66

第13巻第3号（昭和14年3月号）

滄州、杭州に於ける診療報告	多胡檣祐	2
第3診療班業務報告摘録	新垣恒政	22
奉天に於ける法定伝染病の疫学的觀察	西本義一	40
硬水軟化剤に対する一考察	山口一孝	50
同仁会記事		53

第13巻第4号（昭和14年4月号）

中支防疫本部及上海支部作業概況摘録		1
北支防疫班業務報告摘録		10
石家莊診療班報告摘録	飯塚助治	30
事変下に於ける北支中支の特種疾病の分布状況に就て（其一）	岡崎祇容	45
硬水軟化剤に対する一考察	山口一孝	53
同仁会記事		55
編輯後記		62

第13巻第5号（昭和14年5月号）

宣言		2
----	--	---

事変下に於ける北支中支の特種疾病の分布状況に
就て（其ノ二） 岡崎祇容 3

同仁創刊以来の総目次

医事衛生	13
説話	25
文苑	47
其他	50
同仁会記事	53
編輯後記	61

同仁会報

第1冊（昭和15年8月30日）

国民使節としての南京行き（抄） 宮川米次	1
蘇州地方住民の衛生事情 植波寿・大隈政敏	17
阿片に就いて 藤田良仙	31
班処通信	35
同仁会記事	36
編輯後記	41

第2冊（昭和15年11月1日）

会計監督に就て 会計検査官 東谷伝次郎	1
滬上雑感（其の一） 華中中央防疫処長 井上善十郎	10
班処情報	
保定診療班	24
南昌診療分班	27
同仁会記事	29
編輯後記	33

第3冊（昭和16年1月1日）

物の見方と考へ方 興亜院文化部長 村松盡	1
滬上雑感（其の二） 華中中央防疫処長 井上善十郎	3
南京の詩路 元南京診療班長 高天成	19
支那の年中行事について 蘇州防疫処 山本力蔵	22
湯爾和先生薨去	37
湯爾和博士を悼む 清水秀夫	38
湯爾和先生の追憶 下瀬謙太郎	45
湯さんを憶ふ 菅野松太郎	48
班処情報	50

同仁会記事	53
編輯後記	55

第4冊（昭和16年3月1日）

卷頭言	1
滬上雑感（其の三） 華中中央防疫処長 井上善十郎	3
済南地誌 済南医院診療防疫班 飯塚幸作	7
皇国医学の信頼高し	14
支那に於ける仏教と医学 金蕉山人	15
春とともに生れた俳句会	18
華訳日本医書 調査部	19
班処情報	39
同仁会記事	42
編輯後記	44

第5冊（昭和16年5月1日）

日本医界に訴ふ	
北京大学医学院教務長 呉祥鳳	1
淮陰訪問記 華北中央防疫処 駒野丈夫	3
上海断章 井上四六	11
河北省農村の一斑	
天津防疫処 北村直次・佐藤正雄	16
嘆きの鳩笛 華北中央防疫処 稲子中	40
俳壇／歌壇	52
雑記帳	53
班処情報	55
同仁会記事	57
編輯後記	59

第6冊（昭和16年7月1日）

卷頭言	1
遺棄死体の問題	
華中中央防疫処長 井上善十郎	2
新郷県の概況 新郷診療防疫班 杉田真	6
中国婦人を語る座談会	9
一言同仁	18
漢方医には如何なる態度で接すべきか	19
婦人感想 支那婦人の風習	32
巷の相	41
班員感想 現地より観た内地	42
同仁会報に就ての希望	44

遺骨を護って帰るの記	今藤文十郎	46
同仁俳句		47
内地便り		48
班処情報		49
同仁会記事		52
編輯室便り		55

第7冊（昭和16年9月1日）

口絵 同仁会臨時施療班 小姐天使の声		
第七十六議会と医療問題—特に同仁会に関して		1
泰国に於ける結婚風習	耶奈義歩青	7
現地生活のあらまし 保定診療班	川口貴一	11
随筆		
北京ふんぶ物語	夢野黄鳥	16
北京横丁	YN生	17
支那の歌唱	辻正一	18
北京好食	増田東魚	20
中国人の長所と短所に就て	川口貴一	23
班員の声		26
懸賞同仁会歌発表		28
詩／俳句		34
同仁会診療班の歌		35
同仁会ニュース		36
班処巡り 華北支部の巻		38
紙上通信		39
班処情報		40
同仁会殉職職員合同慰霊祭		44
同仁会記事		48
編輯後記		50

第8冊（昭和17年1月1日）

所感	理事 赤木朝治氏談	2
モルヒネ中毒のこと	華北防疫処 鈴木知準	4
聖戦第六年新春を迎へて	開封診療防疫班	19
I. 雑感	班長 青山進午	
II. 開封漫話	高木芳雄	
III. 開封雑話	大森あさ子	
迎春三景		
第1景 正月瑣事記		
	華北防疫処 夢野黄鳥	24
第2景 新郷の春	新郷班 J・M生	27

第3景 かくして春は訪れたり	毛利富郷	29
皖中巡回診療日誌	南京診療班 高塚太吉	32
建設文化を火野氏に聴く		
	華北支部 梅田浩正	41

随想

北京の一年を顧みて		
	華北防疫処 加藤龍川	46
上海から	華中防疫処 山田孤羊	47
北支の印象	開封班 中島賢一	50
支那黴瘡秘録	華北支部 増田東魚	52
随筆		
柿	牧野まこと	58
北京横丁	成川芳江	60
美人の都揚州を訪ねて		
	蘇州防疫処 山本力蔵	62
現地生活読本（石門の巻）	古澤喜千代	68
伸びゆく蒙疆の首都張家口の建設譜		71
同仁会ニュース		72
班処情報		76
同仁会記事		77
編輯後記		84

第9冊（昭和17年3月1日）

同仁会の仕事は愈々「これからだ」		
	専務理事 田邊文四郎	2
所感	監事 中村大三	8
臨汾近在のキリスト教団	臨汾班 服部敏	10
泰人一生に於ける二、三の重大行事	柳歩青	27
随筆		
支那の言葉	華北防疫処 夢野黄鳥	32
上海音楽風景	上海班 辻正一	34
支那の正月と行事に就いて		
	太原班 山本力蔵	38
支那の人身売買に就いて		
	華北支部 増田東魚	42
過去をふりかへりて	石門班 古澤喜千代	47
日華新詩交流 明日・我是少年	柳歩青訳	52
正月日記抄		
三ケ日	華北防疫処 牧野まこと	54
句日記	相馬睦月	55
俳句	佐藤静鳥・牧野まこと・志賀青研	57
短歌と詩	各氏	58

現地生活読本（北京の巻）	古都政男	61
同仁会ニュース		74
班処情報／読後情報		78
同仁会記事		80
編輯後記		85

第10冊（昭和17年6月1日）

海南島の印象	経理部長 池内又一	1
扁鵲考	華北支部 斎藤彦	16
十に因んだ話		
十字路	牧野まこと	26
十円紙幣	夢野黄鳥	27
十日間の旅	堤美代子	28
十の囁き	牧野まこと	31
十句集	静鳥・まこと	32
中支特に蘇州地方の排泄物処理施設，就中「馬桶」に就て	蘇州防疫処 井藤康亮	33
中国人職員は如何なる生活をしているか		
	済南班 木村猛一	39
中国の郵政略史	太原班 山本力蔵	47
俳句		
ライラック	志賀青研	50
北京の春	牧野まこと	50
つちふり	佐藤静鳥	51
柳絮	村上紫峰	51
庭	北京 古都政男	52
おもひで二題		
①新出さんを偲ぶ	毛利富郷	58
②ほとゝぎす	木知世	60
短歌／詩		62
職を同仁会に奉じたる所感		
	保定班 川口貴一	66
現地生活読本		
杭州の四季	水越清子	69
芝罘案内記	斎藤市郎・福岡清吉	72
班処情報		75
北京通信・南京だより		76
同仁会ニュース		78
同仁会記事		80
編輯後記		90

第11冊（昭和17年9月1日）

同仁会創立四十周年記念日を迎ふ	専務理事 田邊文四郎	1
砂塵を越えて		
	福田礼子・糟谷八千代・内田静野	5
北京の夏を語る（座談会）		26
漢口への期待	龍尾生	38
ちゃばなし	太原班 山本力蔵	45
支那煙草史譚	華北支部 増田東魚	57
現地生活読本（開封の巻）		
	山口きぬ子・吉田律子	60
文苑 日記，手紙，短歌，俳句，詩		63
日本を訪れて	方一欽	76
回覧板		78
班処だより		80
同仁会ニュース		84
同仁会記事		88
誌上通信 寄宿舍の窓から		94
編輯後記		95

第12冊（昭和18年1月1日）

大東亜戦争第3年の迎春に当りて		
所謂西医の概況と所感	芝罘班 小鹿整四郎	1
中支に於ける庶民の医薬に就いて		
	編集部調査	6
喇嘛の陰陽仏に就いて	華北支部 増田東魚	11
蘇州美人と毒亀の話	山本霞涯	17
現地生活読本（新郷の巻）	杉田真	23
南京まで	ふぢた	31
防疫戦記	相良廸彦	34
随想		
回顧	石門防疫班 矢嶋ユキ	41
中意横道	M生	42
華北建設と邦人の意気		
	華北防疫班 斎藤秀峰	43
回覧板		44
寄宿舍通信		46
詩，句，歌		50
殉職職員合同慰霊祭記事		56
同仁会記事		60
編輯後記		67

第13冊（昭和18年3月1日）

大東亜医学に就て	副会長 宮川米次	1
江南施療行	上海 佐加倉滬浪	9
現地便り		
①金華診療防疫班	大西晃	53
②杭州診療班	S A 生	57
③青島診療班	大澤いのゑ	59
現地生活読本		
海州案内記	伊藤定次郎	61
随筆		
霧水	佐藤静島	63
雲と泥鰌	牧野まこと	65
新春風景	佐加倉生	67
樸春	古都政男	68
在支4ヶ年	牧野まこと	74
職域所感（感想）	東郷実行	78
短歌，俳句		81
紙上通信		84
同仁会記事		85
編輯後記		94

第14冊（昭和18年6月1日）

蒙古雜観	華北防 佐藤久蔵	2
支那貨幣	上海班 樋渡雋二郎	21
西湖の月	南京班 安井広	27
巡回診療日誌	開封班 衣絵	39
班処通信		
南昌だより		46
無錫だより		47
新郷だより		50
青島だより		51
北防だより		53
随想		
北京の乞食	笹島博	54
支那民族性覚書	S A 生	57
現地生活読本（張家口）	早川浅吉	59
短歌・俳句・詩		63
美しき忘れもの	西条智行	68
同仁会記事		70
編輯後記		79

第15冊（昭和18年9月）

訓示 昭和18年9月29日 同仁会会長近衛文麿		
経営管見	経理部長 池内又一	4
海南島診療防疫簿余白	榆林班 大村寛	12
徐州と古跡	徐州班 中村文萍	19
梅田処長の死を悼む		
	北海道帝国大学教授 井上善十郎	26
梅田春塘先生遺稿		32
支那四億の民族	華中防 瀬下末吉	34
歌壇		39
俳壇		42
現地だより		44
同仁会記事		47
編輯後記		52

第16冊（昭和19年1月）

訓示 昭和18年9月29日 同仁会会長近衛文麿		
靖亜の大業に殉ぜよ	専務理事 田邊文四郎	2
第一戦地区安義方面施療行	南昌班 慈浪	5
丹陽特別地区巡回診療日誌	南京班 井合勉	18
一般中国人の家庭食に就いて		
	北支衛研 勝又温子	25
間島春男君私見	私立京都病院 後藤惣兵衛	38
随筆集		43
同仁会四十年史出来		51
現地だより		57
歌壇		54
俳壇		55
班処通信		57
殉職職員合同慰霊祭		60
同仁会記事		66

第17冊（昭和19年4月）

訓示 昭和18年9月29日 同仁会会長近衛文麿		
北支の衛生工学	野澤典美	2
華北戒煙療養所概観	華北防 鈴木知準	6
ビルマの話	井上頭一郎	20
コレラ防疫座談会		22
虱譚	華北防 村上務	35
婦長候補の筆の跡		33
俳壇		42
歌壇		43
下瀬謙太郎君の長逝を悼む	飯島茂	46

言の葉のくすし	下村海南	48
謙堂下瀬先生を偲ぶ	穂坂唯一郎	51
班処通信		56
同仁会記事		62

第18冊（昭和19年9月）

訓示 昭和18年9月27日 同仁会会長近衛文麿		
喇嘛と牛の伝説	増田東魚	1
国民政府衛生署長陸潤之氏歓迎懇談会		
	総務部	8
海軍記念日に当り日露戦役当時の追憶		
	森田広	12
随想		
ビルマのさまざま	藤田良仙	14
美しきかな北京	園みどり	16
杭州と名勝	S A 生	18
菊	古都政男	19
簡素の美	漣浪生	21
詞藻		
外科患者の詩歌	高不驕	22
近什の中より	飯島茂	23
同仁歌壇		24
同人俳壇		26
班処通信		28
同仁会記事		34
編輯後記		47